感染症発生動向調査事業報告書

－平成２５年版－

山梨県福祉保健部

目　　次

Ⅰ　事業概要
1　感染症発生動向調査事業 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
2　対象感染症 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
3　地域区分と定点医療機関数 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

Ⅱ　患者発生状況
1　全数把握対象感染症 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
2　定点把握対象感染症 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
2-1 インフルエンザ定点から報告された感染症 ・・・・・・・・・・・・ 6
○インフルエンザ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
(鳥インフルエンザ及び新型インフルエンザ等感染症を除く)
2-2 小児科定点から報告された感染症 ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
○ ＲＳウイルス感染症 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
○ 咽頭結膜熱 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
○ Ａ群溶血性レンサ球菌咽頭炎 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
○ 感染性胃腸炎 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
○ 水痘 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12
○ 手足口病 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
○ 伝染性紅斑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14
○ 突発性発しん ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
○ 百日咳 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 16
○ ヘルパンギーナ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
○ 流行性耳下腺炎 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18
2-3 眼科定点から報告された感染症 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
○ 急性出血性結膜炎 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
○ 流行性角結膜炎 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
2-4 性感染症定点から報告された感染症 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
○ 性器クラミジア感染症 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
○ 性器ヘルペスウイルス感染症 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22
○ 尖圭コンジローマ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23
○ 淋菌感染症 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
2-5 基幹定点から報告された感染症 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
○ 細菌性髄膜炎 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26
○ 無菌性髄膜炎 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27

○ マイコプラズマ肺炎 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28
○ クラミジア肺炎（オウム病を除く） ・・・・・・・・・・・・・・・・・ 29
○ メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症 ・・・・・・・・・・・・・・ 30
○ ペニシリン耐性肺炎球菌感染症 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31
○ 薬剤耐性緑膿菌感染症 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32
○ 薬剤耐性アシネトバクター感染症・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33

Ⅲ 病原微生物検出状況
1 ウイルス検出状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34
2 細菌検出状況 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35

Ⅳ 参考資料
1 感染症発生動向調査の指定届出機関一覧 ・・・・・・・・・・・・・・・ 36
2 全数把握対象感染症の報告数 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38
3 定点把握対象感染症の報告数と定点当たり報告数 ・・・・・・・・・・・ 39
4 平成 23 年と 24 年における定点当たり報告数の比較 ・・・・・・・・・・ 40
5 定点把握対象感染症の定点当たり報告数の推移 ・・・・・・・・・・・・ 41
6 感染症発生動向調査の調査報告週対応表 ・・・・・・・・・・・・・・・ 42

Ⅰ　事業概要

1　感染症発生動向調査事業

本事業は昭和 56 年 7 月から 18 疾病を対象に開始されてから、システムのオンライン化や対象とする疾病等、充実・拡大されて運用されてきた。

平成 11 年 4 月「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」(以下「感染症法」という。）の施行により、感染症発生動向調査が感染症の発生及びまん延の防止を目的として感染症施策の一つに位置づけられた。(感染症法第 3 章　感染症に関する情報の収集及び公表、第 12 条、第 14 条）

平成 19 年 4 月の感染症法の改正により、発生動向調査の対象疾病の再分類や結核予防法の統合等、大幅な変更があり、その後平成 20 年 1 月には「風しん」及び「麻しん」が五類感染症の定点把握の対象から五類感染症の全数把握対象に変更された。5 月には「鳥インフルエンザ（H5N1)」が二類感染症に追加されるとともに、感染症の類別に新型インフルエンザ等感染症が追加された。平成 23 年 2 月には「チクングニア熱」が四類感染症に、「薬剤耐性アシネトバクター感染症」が五類感染症（定点）に追加された。

平成 25 年 3 月から「重症熱性血小板減少症候群（病原体が SFTS ウイルスであるものに限る。)」が四類感染症に、4 月から「侵襲性インフルエンザ菌感染症」「侵襲性髄膜炎菌感染症」「侵襲性肺炎球菌感染症」が五類感染症（全数）に追加され、「髄膜炎菌性髄膜炎」は削除された。さらに 5 月から「鳥インフルエンザ（H7N9)」が指定感染症に定められた。

山梨県では情報を週及び月単位で収集・分析し、関係機関に還元するとともに、ホームページを通じて県民に公開している。

2　対象感染症

平成 25 年 12 月末現在、全数把握対象は 81 疾患、定点把握対象は 26 疾患の計 107 疾患を調査対象としている。

全数把握対象（81 疾病）

	対　象　疾　病
一類感染症（7 疾病）	(1)エボラ出血熱、(2)クリミア・コンゴ出血熱、(3)痘そう、(4)南米出血熱、(5)ペスト、(6)マールブルグ病、(7)ラッサ熱
二類感染症（5 疾病）	(8)急性灰白髄炎、(9)結核、(10)ジフテリア、(11)重症急性呼吸器症候群(病原体が SARS コロナウイルスであるものに限る)、(12)鳥インフルエンザ（H5N1）
三類感染症（5 疾病）	(13)コレラ、(14)細菌性赤痢、(15)腸管出血性大腸菌感染症、(16)腸チフス、(17)パラチフス
四類感染症（43 疾病）	(18)E 型肝炎、(19)ウエストナイル熱（ウエストナイル脳

	炎を含む)、(20)A 型肝炎、(21) エキノコックス症、(22)黄熱、(23)オウム病、(24)オムスク出血熱、(25)回帰熱、(26)キャサヌル森林病、(27)Q 熱、(28)狂犬病、(29)コクシジオイデス症、(30)サル痘、(31)重症熱性血小板減少症候群(病原体がフレボウイルス属 SFTS ウイルスであるものに限る)、(32)腎症候性出血熱、(33)西部ウマ脳炎、(34)ダニ媒介脳炎、(35)炭疽、(36)チクングニア熱、(37)つつが虫病、(38)デング熱、(39)東部ウマ脳炎、(40)鳥インフルエンザ(H5N1 及び H7N9 を除く)、(41)ニパウイルス感染症、(42)日本紅斑熱、(43)日本脳炎、(44)ハンタウイルス肺症候群、(45)B ウイルス病、(46)鼻疽、(47)ブルセラ症、(48)ベネズエラウマ脳炎、(49)ヘンドラウイルス感染症、(50)発疹チフス、(51)ボツリヌス症、(52)マラリア、(53)野兎病、(54)ライム病、(55)リッサウイルス感染症、(56)リフトバレー熱、(57)類鼻疽、(58)レジオネラ症、(59)レプトスピラ症、(60)ロッキー山紅斑熱
五類感染症(18 疾病)	(61)アメーバ赤痢、(62)ウイルス性肝炎(E 型肝炎及び A 型肝炎を除く)、(63)急性脳炎(ウエストナイル脳炎、西部ウマ脳炎、ダニ媒介脳炎、東部ウマ脳炎、日本脳炎、ベネズエラウマ脳炎及びリフトバレー熱を除く)、(64)クリプトスポリジウム症、(65)クロイツフェルト・ヤコブ病、(66)劇症型溶血性レンサ球菌感染症、(67)後天性免疫不全症候群、(68)ジアルジア症、(69)侵襲性インフルエンザ菌感染症、(70)侵襲性髄膜炎菌感染症、(71 侵襲性肺炎球菌感染症、 (72) 先天性風しん症候群、(73)梅毒、(74)破傷風、(75)バンコマイシン耐性黄色ブドウ球菌感染症、(76)バンコマイシン耐性腸球菌感染症、(77)風しん、(78)麻しん
新型インフルエンザ等感染症(2 疾病)	(105)新型インフルエンザ、(106)再興型インフルエンザ
指定感染症(1 疾病)	(107)鳥インフルエンザ(H7N9)

定点把握対象（五類感染症・26 疾病）

	対　象　疾　病
小児科定点（11 疾病）	(79)RS ウイルス感染症、(80)咽頭結膜熱、(81)A 群溶血性レンサ球菌咽頭炎、(82)感染性胃腸炎、(83)水痘、(84)手足口病、(85)伝染性紅斑、(86)突発性発しん、(87)百日咳、(88)ヘルパンギーナ、(89)流行性耳下腺炎
インフルエンザ定点（1 疾病）	(90)インフルエンザ（鳥インフルエンザ及び新型インフルエンザ等感染症を除く）
眼科定点（2 疾病）	(91)急性出血性結膜炎、(92)流行性角結膜炎
STD 定点（4 疾病）	(93)性器クラミジア感染症、(94)性器ヘルペスウイルス感染症、(95)尖圭コンジローマ、(96)淋菌感染症
基幹定点（8 疾病）	(97)クラミジア肺炎（オウム病を除く）、(98)細菌性髄膜炎（インフルエンザ菌、髄膜炎菌、肺炎球菌を原因として同定された場合を除く）、(99)ペニシリン耐性肺炎球菌感染症、(100)マイコプラズマ肺炎、(101)無菌性髄膜炎、(102)メシチリン耐性黄色ブドウ球菌感染症、(103)薬剤耐性アシネトバクター感染症、(104)薬剤耐性緑膿菌感染症

3　地域区分と定点医療機関数

本県の人口及び医療機関の分布を考慮し、罹患状況を報告する患者定点と病原体検査のための検査材料を採取する病原体定点を下表のように設定した。（参考資料１「感染症発生動向調査の指定届出機関一覧表」参照）

		中 北	峡北支所	峡 東	峡 南	富士･東部	計
患者定点	小児科定点	8	5	4	2	5	24
	インフルエンザ定点	13	8	7	3	9	40
	眼科定点	3	2	2	0	2	9
	ＳＴＤ定点	3	2	2	0	2	9
	基幹定点	3	2	2	1	2	10
	合計	30	19	17	6	20	92
病原体定点	小児科定点	2	0	0	0	1	3
	インフルエンザ定点	1	1	1	1	1	5
	眼科定点	1	0	0	0	0	1
	ＳＴＤ定点	0	0	0	0	0	0
	基幹定点	3	2	2	1	2	10
	合計	7	3	3	2	4	19

II　患者発生状況

1　全数把握対象感染症

山梨県及び全国における平成 25 年の全数把握対象感染症の報告数を参考資料２に示した。

《一類感染症》
　報告はなかった。

《二類感染症》
　二類感染症 5 疾患のうち、結核 91 例の報告があった。

《三類感染症》
　三類感染症 5 疾患のうち、細菌性赤痢 3 例（ソンネＤ群：3 例)、腸管出血性大腸菌感染症 11 例（0103：2 例、0121：1 例、0157：8 例)、腸チフス 1 例の 3 疾患 15 例の報告があった。

《四類感染症》
　四類感染症 43 疾患のうち、Ｅ型肝炎（3 例)、Ａ型肝炎（2 例)、レジオネラ症（6 例）の 3 疾患 11 例の報告があった。

《五類感染症》
　五類感染症 18 疾患のうち、アメーバ赤痢(7 例)、ウイルス性肝炎（E 型肝炎及び A 型肝炎を除く）(3 例)、急性脳炎（ウエストナイル脳炎、西部馬脳炎、ダニ媒介脳炎、東部ウマ脳炎、日本脳炎、ベネズエラウマ脳炎及びリフトバレー熱を除く）(2 例)、クロイツフェルト・ヤコブ病(1 例)、劇症型溶血性レンサ球菌感染症(1 例)、後天性免疫不全症候群(3 例)、梅毒（4 例)、風しん（28 例）の 8 疾患 49 例の報告があった。

《新型インフルエンザ等感染症》
　報告はなかった。

《指定感染症》
　報告はなかった。

2　定点把握対象感染症

山梨県および全国における平成 25 年の疾患別報告数と定点当たり報告数を参考資料３に示した。本県で患者報告数が多かった疾病は、インフルエンザ（9,719 例)、感染性胃腸炎（7,414 例)、手足口病(3,054 例)、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎(1,641 例)でいずれも報告数が 1,000 例を超えた。定点当たりの報告数が全国に比べて高かった疾病は、手足口病（山梨県 127.25、全国 96.54)、インフルエンザ（山梨県 242.98、全国 237.20)、クラミジア肺炎（山梨県 1.70、全国 1.59)、の 3 疾患であった。薬剤耐性アシネトバクター感染症の報告例はなかった。

平成 24 年と 25 年における定点当たり報告数の比較を参考資料表４に示した。定点当たりの報告数が前年より増加した疾病は、手足口病（12.46 倍)、細菌性髄膜炎（4.00 倍)、ＲＳウイルス感染症（1.69 倍)、など 8 疾病であった。

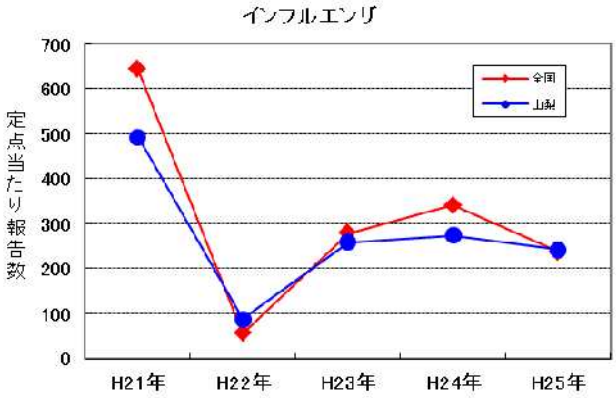
２－１　インフルエンザ定点から報告された感染症

インフルエンザ定点は 40 で、県内全保健所管内にあり週報として報告される。

○インフルエンザ（鳥インフルエンザ及び新型インフルエンザ等感染症を除く）

定点医療機関から 9,719 例（定点当たり報告数 242.98）の報告があり、前年（10,972 例）よりやや減少した。

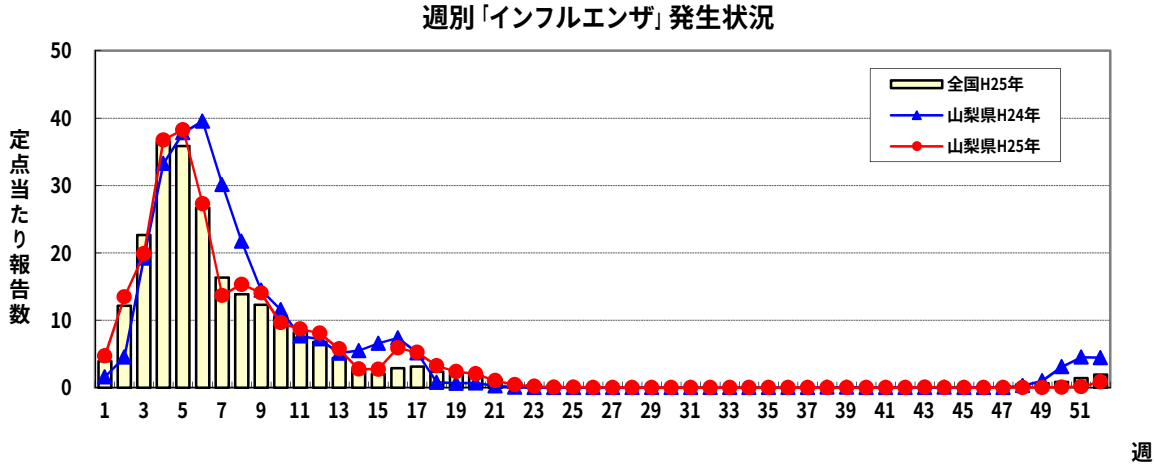
最近 5 年間の状況は全国とほぼ同様の傾向であった。



《週別発生状況》

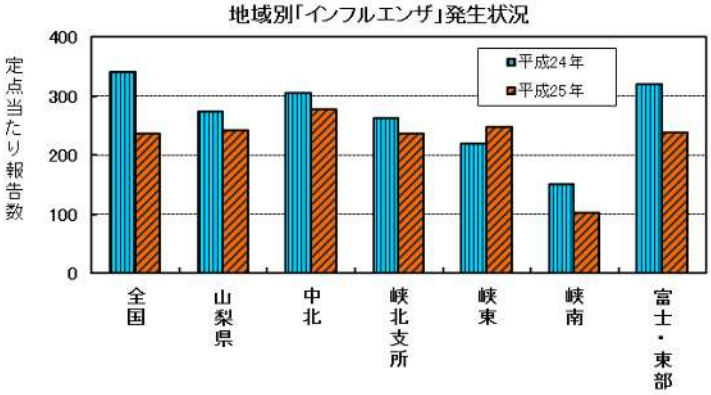
定点当たりの報告数が第 2 週に 13.50 となり、第 4 週に 36.75、第 5 週に 38.28 と流行発生警報である 30 を超えた。ピークは第 5 週であった。その後減少し、第 8 週と第 16 週に小さいピークが見られたが、第 22 週以降は定点当たり 1.00 以下となり流行は終息した。第 43 週から患者報告が始まったが、2013/2014 シーズンの流行開始の基準となる 1.00 を超えることはなかった。

年間を通じて、全国と同様の発生状況を示した。



《地域別発生状況》

定点当たりの報告数が最も多かったのは中北保健所管内（278.85）、次いで峡東保健所管内（247.86）であった。最も少なかったのは前年と同じ峡南保健所管内（102.67）だった。



２－２　小児科定点から報告された感染症

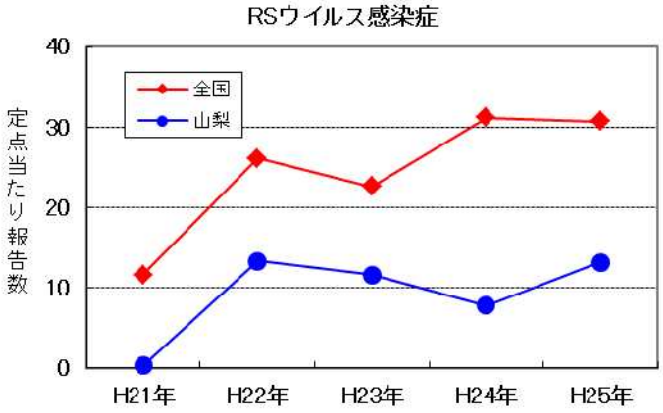
小児科定点は 24 で、県内全保健所管内にあり週報として報告される。

総報告数は 14,325 例で、前年（14,105 例）よりやや多かった。前年と比較して報告数が増加した疾患は、RS ウイルス感染症、手足口病、突発性発疹、百日咳、ヘルパンギーナの 5 疾患であった。他の 6 疾患（咽頭結膜炎、A群溶血性連鎖球菌咽頭炎、感染性胃腸炎、水痘、伝染性紅斑、流行性耳下腺炎）は前年に比べ減少した。

○ ＲＳウイルス感染症

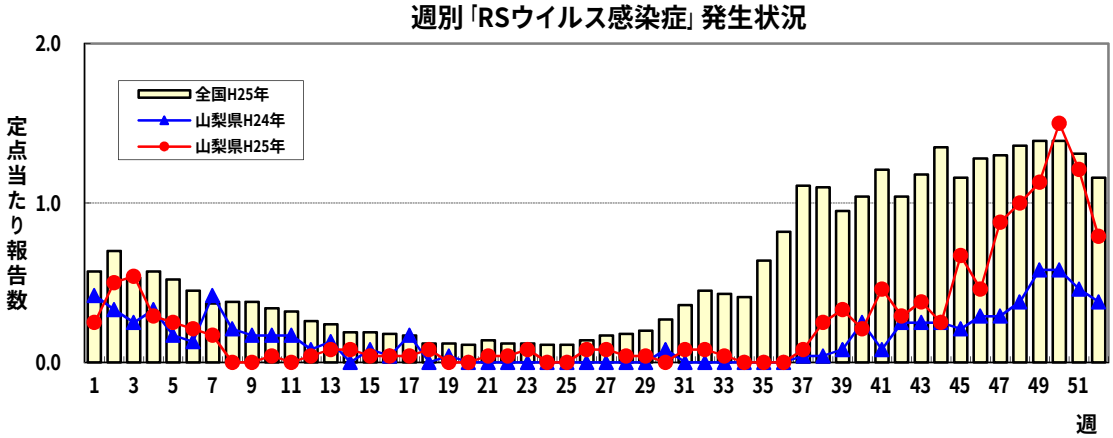
定点医療機関から 316 例（定点当たり報告数 13.17）の報告があり、前年（187 例）より増加した。

最近 5 年間の状況をみると、平成 22 年をピークに減少したが本年再度増加した。



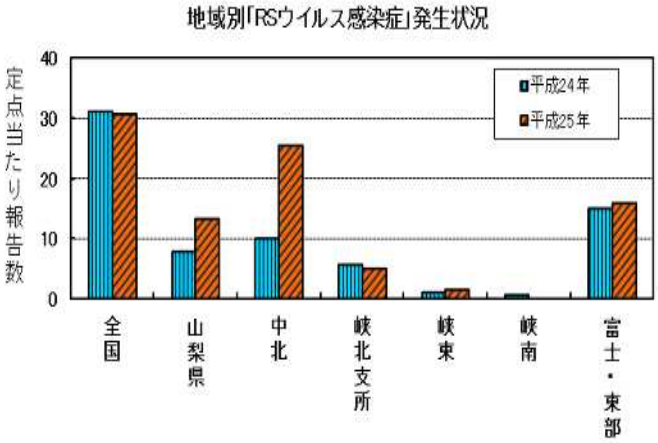
《週別発生状況》

第 47 週から増加し、第 50 週をピーク(1.50)とした冬季の流行がみられた。



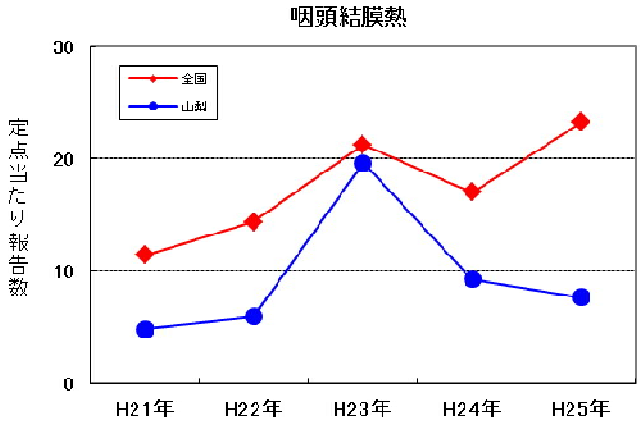
《地域別発生状況》

定点当たりの報告数が最も多かったのは中北保健所管内（25.63）、次いで富士・東部保健所管内（16.00）であった。峡南保健所管内からの報告はなかった。



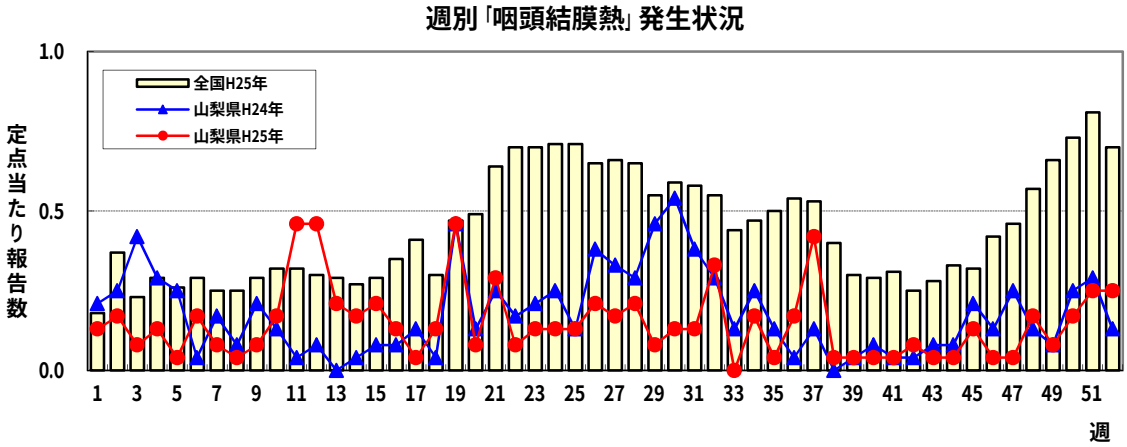
○ 咽頭結膜熱

定点医療機関から 184 例（定点当たり報告数 7.67）の報告があった。全国では前年に比べ約 1.4 倍の増加であったが、本県では前年（223 例）の約 80%の報告数であった。



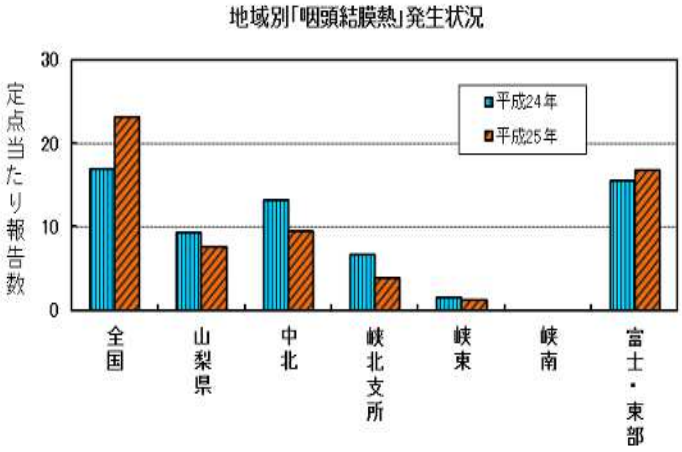
《週別発生状況》

第 11・12・19・37 週の報告が目立ったが、大きな流行はなかった。



《地域別発生状況》

定点当たりの報告数が最も多かったのは富士・東部保健所管内（16.8）で、前年に続いて峡南保健所管内からの報告はなかった。

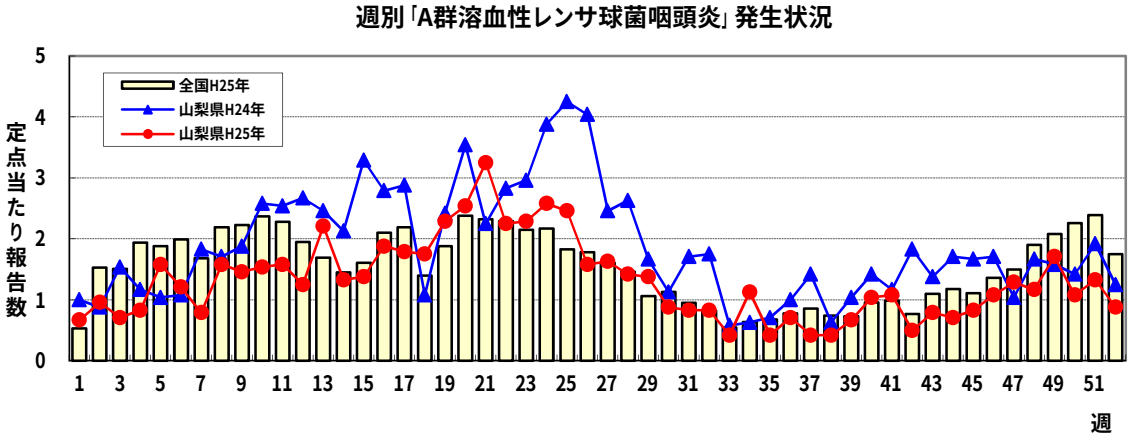


○ A群溶血性レンサ球菌咽頭炎

定点医療機関から 1,641 例（定点当たり報告数 68.38）の報告があり、前年（2,347 例）の約 70%であった。

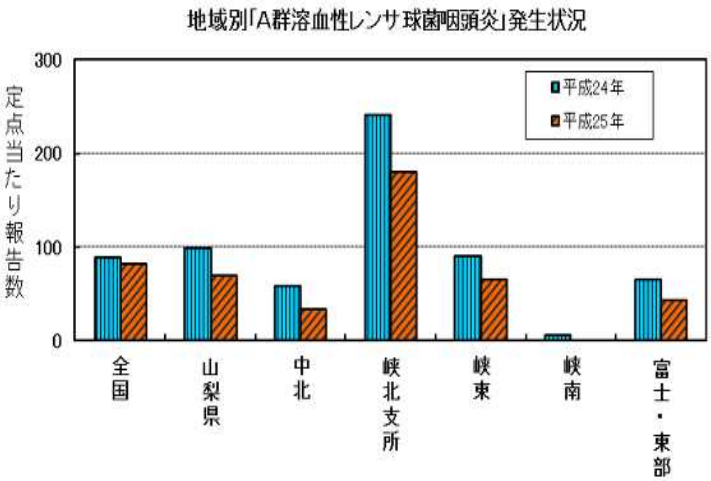
《週別発生状況》

第 21 週にピーク（3.25）が見られ、年間を通して全国と同様の発生状況であった。



《地域別発生状況》

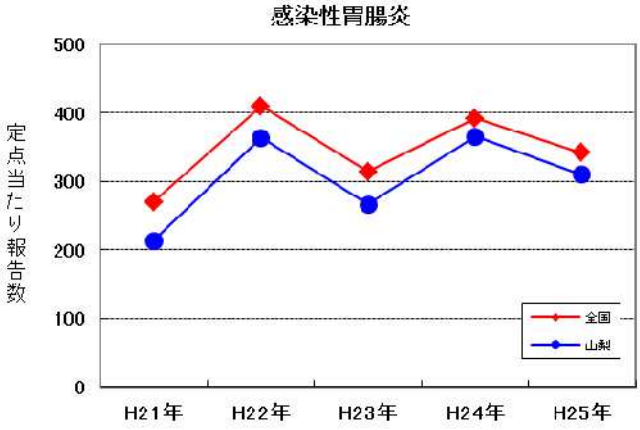
定点当たりの報告数が最も多かったのは前年に続いて峡北支所管内（179.4）だったが、すべての地域で前年より減少した。峡南保健所管内からの報告はなかった。



○ 感染性胃腸炎

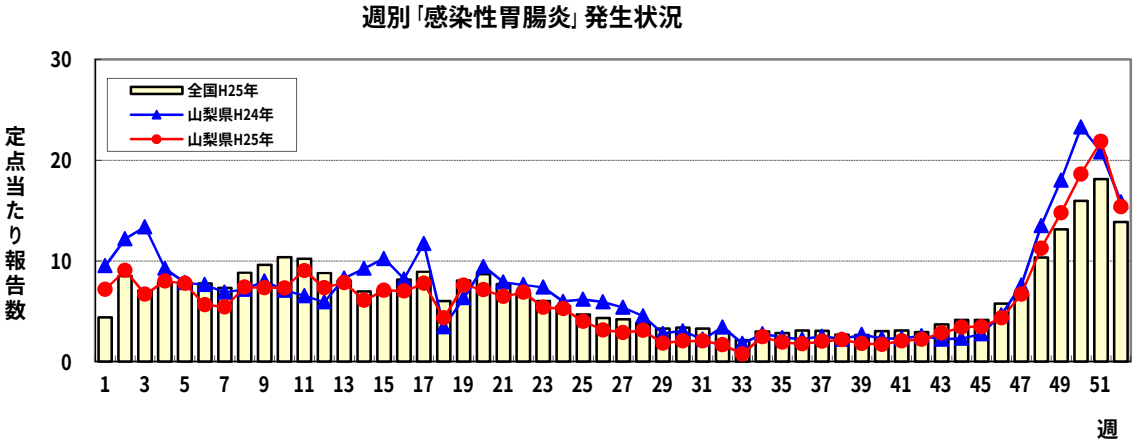
定点医療機関から 7,414 例（定点当たり報告数 308.92）の報告があり、前年（8,768 例）の約 85%であった。

最近 5 年間は、全国より少ない状況でほぼ同様に推移している。



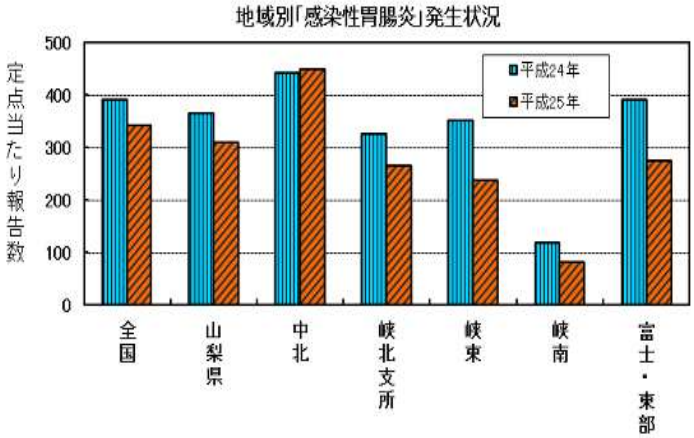
《週別発生状況》

第 51 週(21.88)に警報基準値である 20.00 を超えてピークとなった。年間を通してほぼ全国と同様の発生状況を示した。



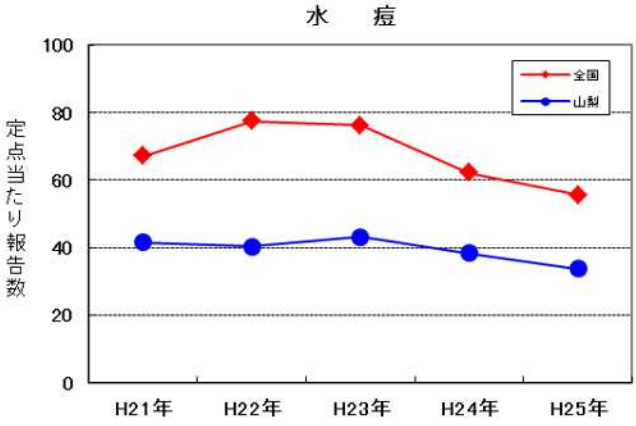
《地域別発生状況》

定点あたりの報告数が最も多かった中北保健所管内（449.38）は、前年よりやや増加したが、他の地域は前年より減少した



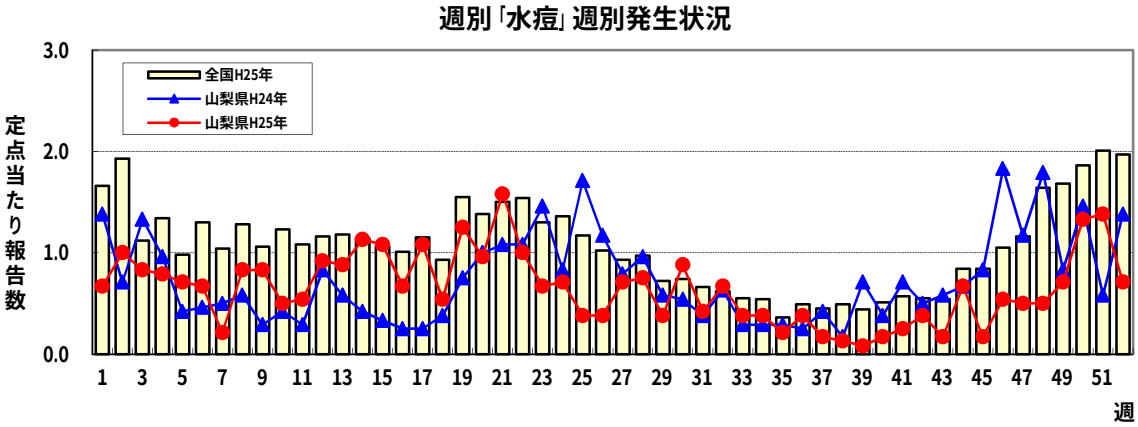
○ 水　痘

定点医療機関から 810 例（定点当たり報告数 33.75）の報告があり、前年（923 例）よりやや少なく、2 年続けて減少傾向にある。



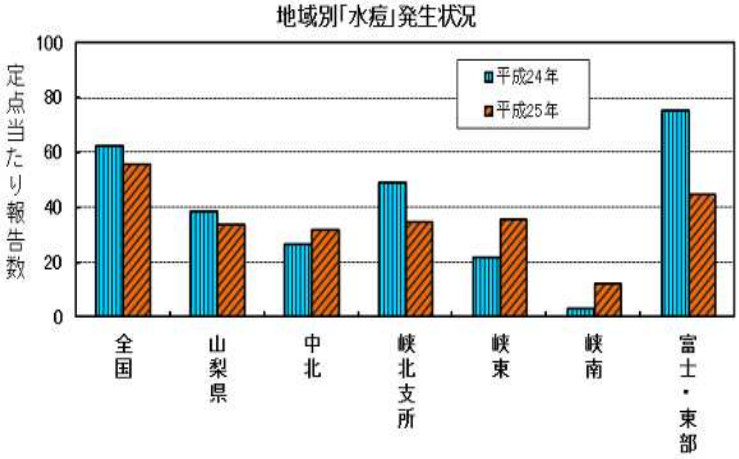
《週別発生状況》

最多報告は第 21 週（定点当たり 1.58）で、年間を通して全国と同様の発生状況であった。



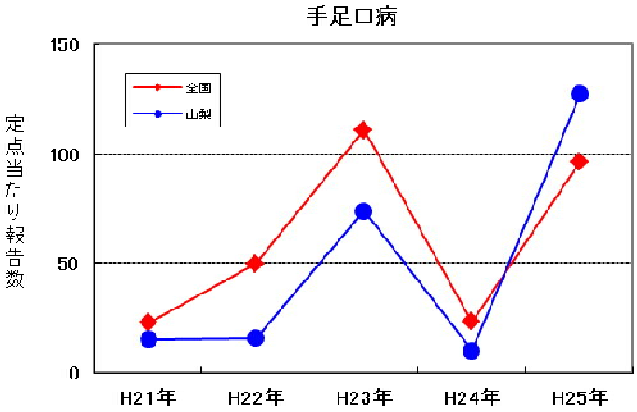
《地域別発生状況》

定点当たりの報告数が最も多かったのは富士・東部保健所管内（44.40）であった。



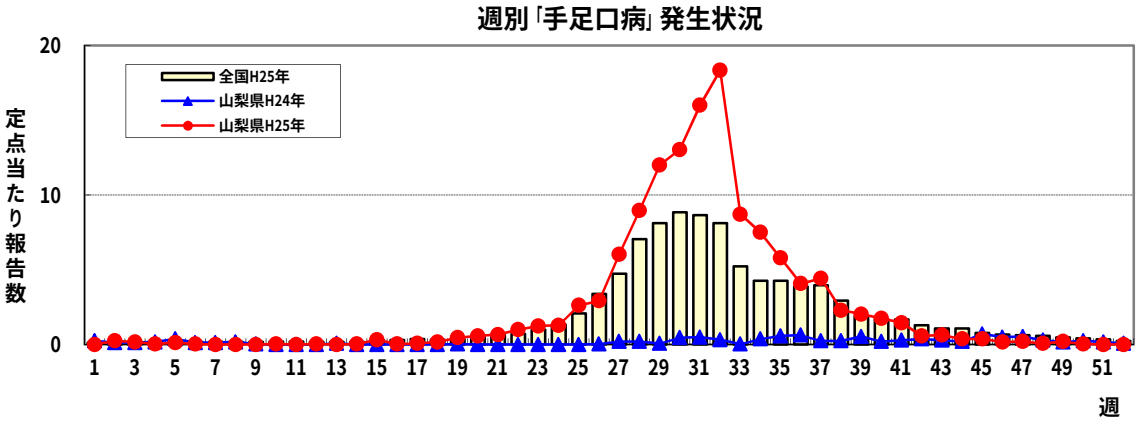
○ 手足口病

定点医療機関から 3,054 例（定点当たり報告数 127.25）の報告があり、前年（245 例）に比べ 12 倍の増加であった。全国でも前年の 4 倍の報告であったが、本県は全国の定点当たりの報告数を上回り、最近 5 年間で最も多い報告数であった。



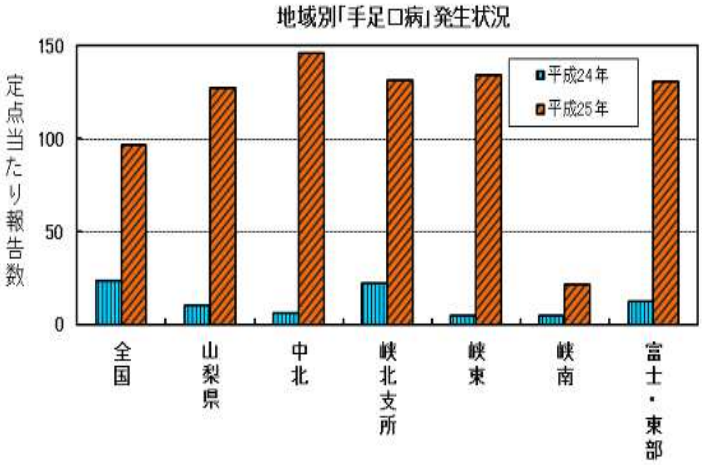
《週別発生状況》

第 25 週に増加し始め、第 32 週のピーク（18.33）を中心とした大きな流行が見られた。第 27～37 週は全国を上回る流行状況であった



《地域別発生状況》

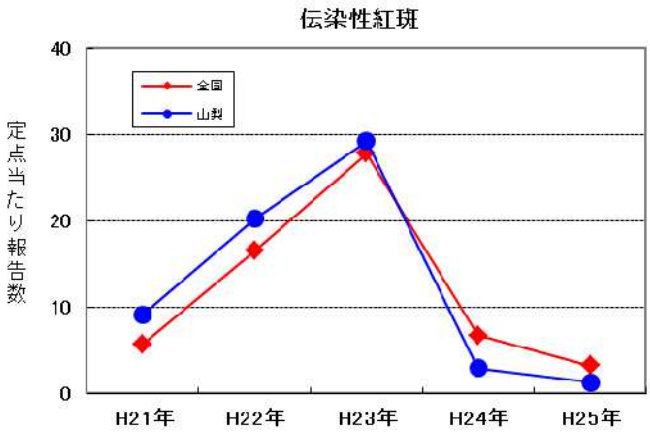
すべての地域で増加したが、定点当たりの報告数が最も多かった中北管内(145.75)では、前年の約 23 倍の報告数であった。



○ 伝染性紅斑

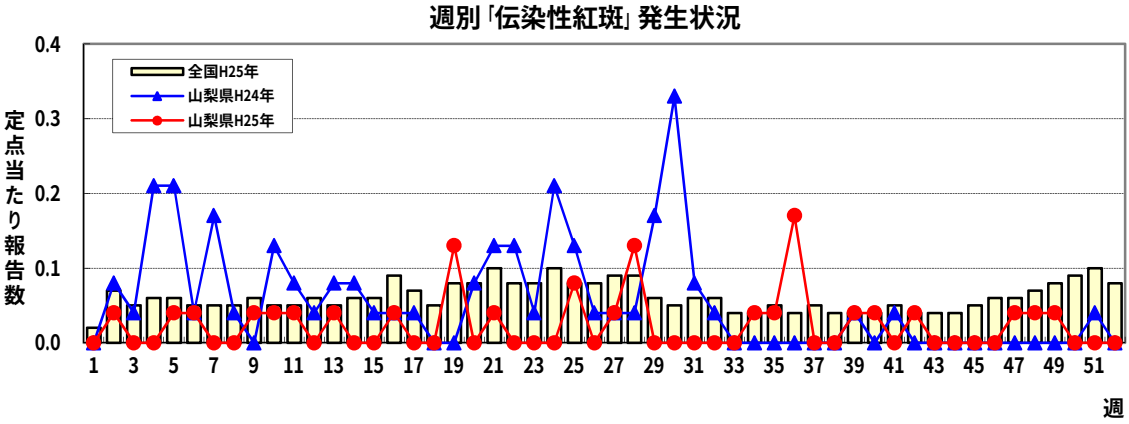
定点医療機関から 30 例（定点当たり報告数 1.25）の報告があり、前年（70 例）の約半数の報告であった。

最近 5 年間の状況は、全国と同様に推移している。



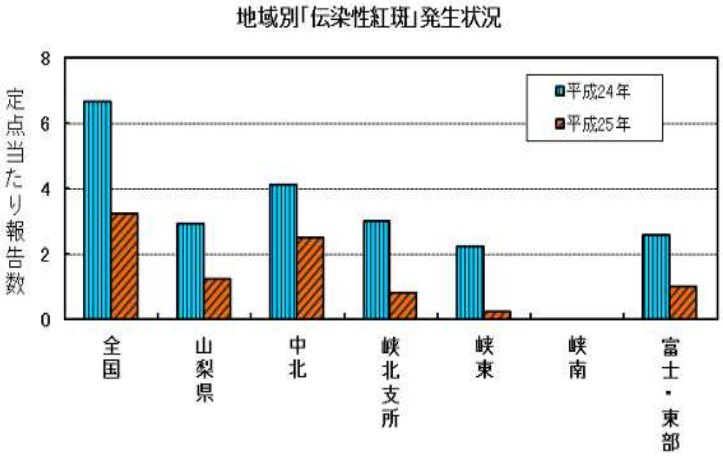
《週別発生状況》

第 19・28・36 週の報告が目立ったが、流行はなかった。



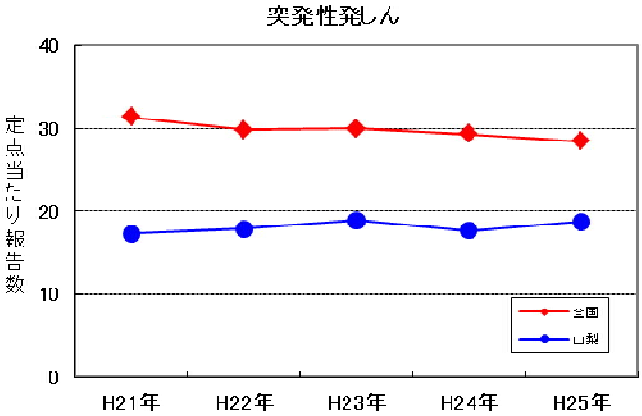
《地域別発生状況》

定点当たりの報告数が最も多かったのは中北保健所管内（2.5）で、前年に比べすべての地域で減少した。前年に続いて峡南保健所管内からの報告はなかった。



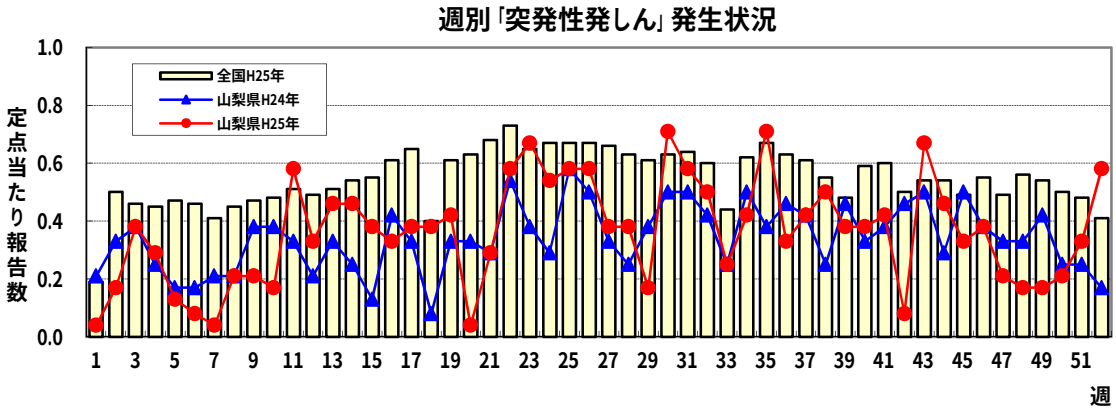
○ 突発性発疹

定点医療機関から 451 例（定点当たり報告数 18.79）の報告があり、前年（424 例）よりやや多かったものの、最近 5 年間の状況はほぼ横ばいで、全国より少ない状況で同様に推移している。



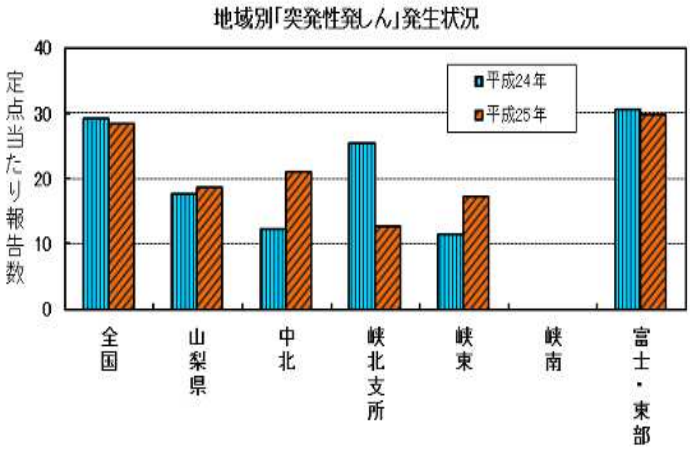
《週別発生状況》

年間を通して報告があったが、大きな流行はみられなかった。



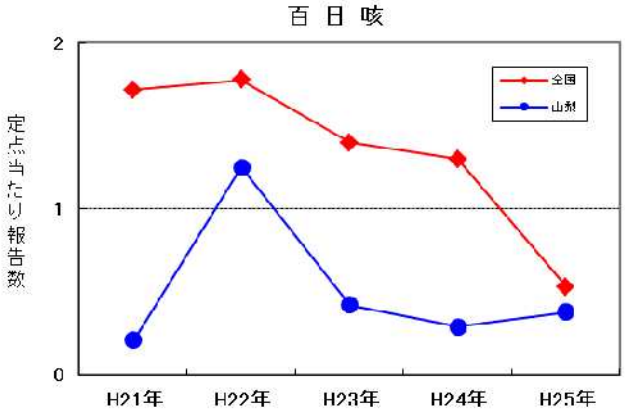
《地域別発生状況》

定点当たりの報告数が最も多かったのは富士・東部保健所管内（29.80）で、前年に続き峡南保健所管内からの報告はなかった。



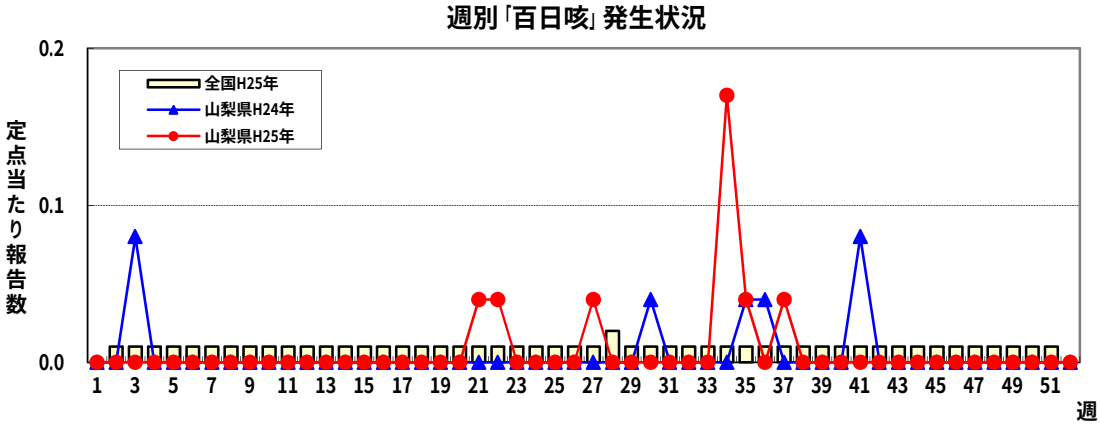
○ 百日咳

定点医療機関から 9 例（定点当たり報告数 0.38）の報告があり、前年（7 例）より 2 例の増加だった。



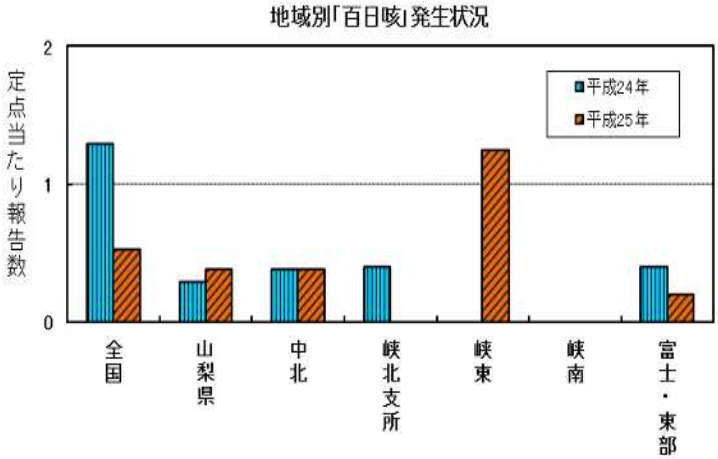
《週別発生状況》

第 34 週の報告が目立ったが、流行はなかった。



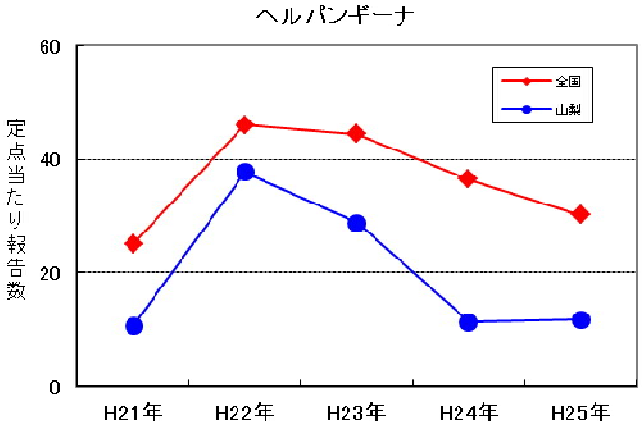
《地域別発生状況》

9 例のうち 5 例が峡東保健所管内からの報告であり、峡北支所および峡南保健所管内からの報告はなかった。



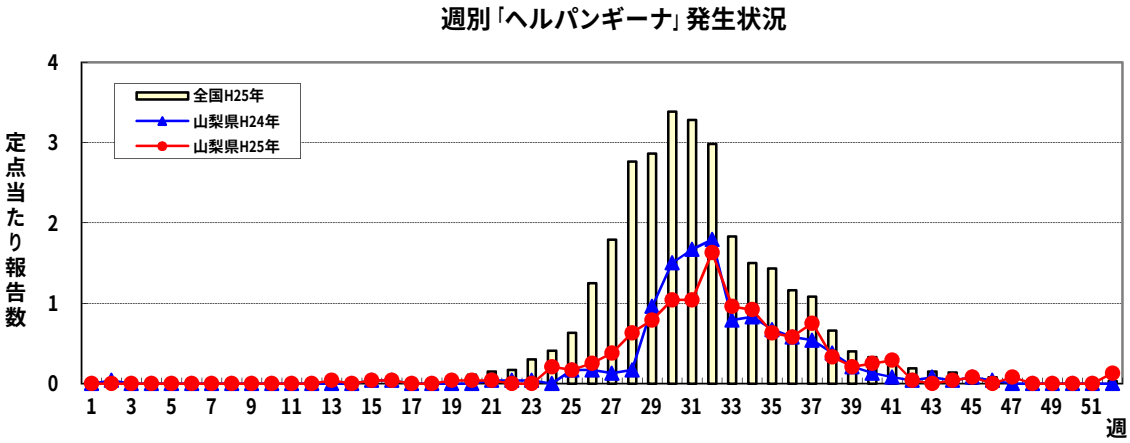
○ ヘルパンギーナ

定点医療機関から 280 例（定点当たり報告数 11.67）の報告があり、前年（271 例）と比べてやや増加した。



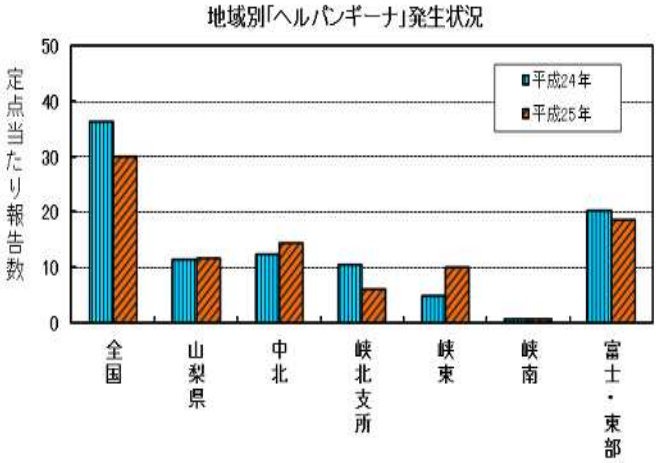
《週別発生状況》

第 27 週から報告数が増加し始め第 32 週にピーク(1.63)となり、夏季の報告が目立ったが、大きな流行はなかった。



《地域別発生状況》

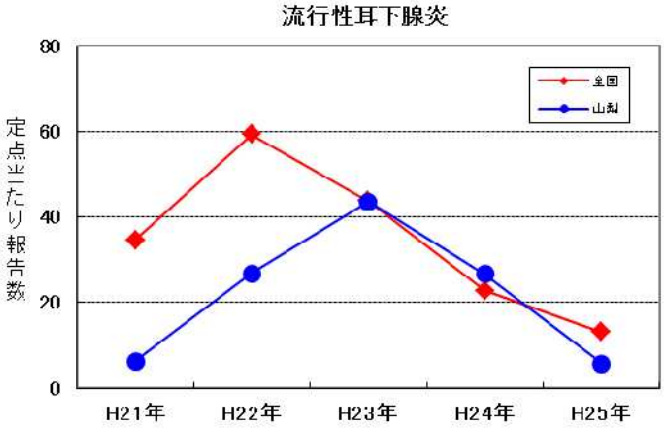
定点当たりの報告数が最も多かったのは富士・東部保健所管内（18.60）だった。すべての地域から報告があった。



○ 流行性耳下腺炎

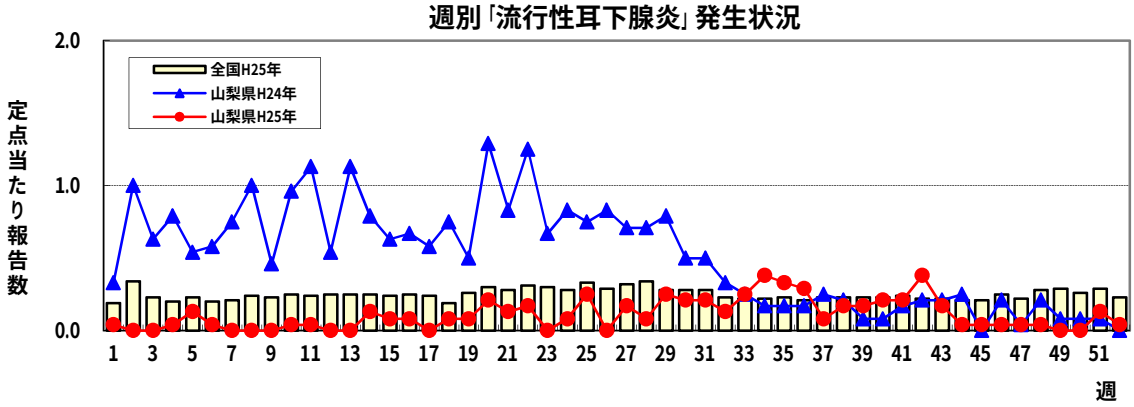
定点医療機関から 136 例（定点当たり報告数 5.67）の報告があり、前年（640 例）の約 20%と大きく減少した。

最近 5 年間の状況をみると、全国では H22 年をピークに、本県では H23 年をピークにその後減少している。



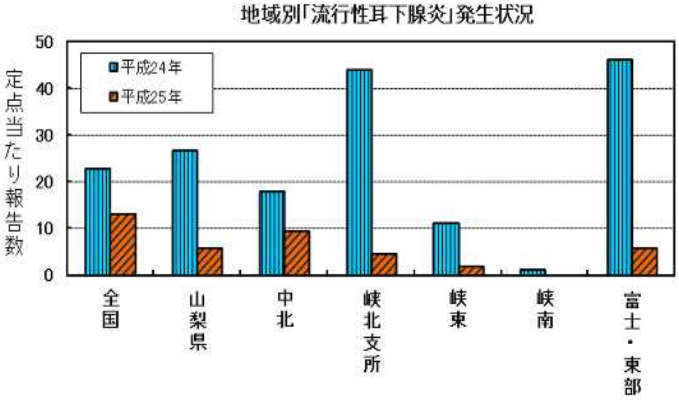
《週別発生状況》

年間を通して報告がみられたが、大きな流行はなかった。



《地域別発生状況》

定点当たりの報告数が最も多かったのは中北保健所管内（9.50）で、すべての地域で前年より減少した。



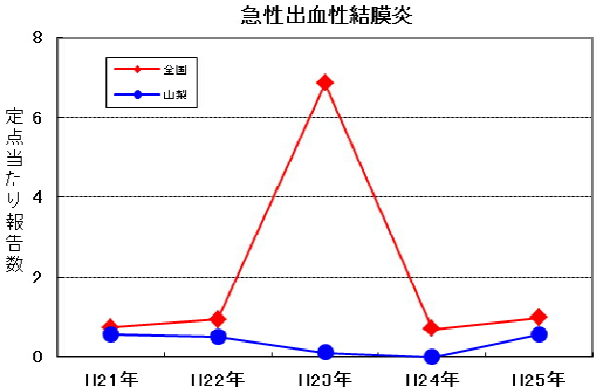
２－３　眼科定点から報告された感染症

眼科定点は、峡南保健所を除く 4 保健所管内に 9 定点あり、週報として報告される。

平成 25 年に報告された総数は 105 例で、急性出血性結膜炎 5 例、流行性角結膜炎 100 例であった。

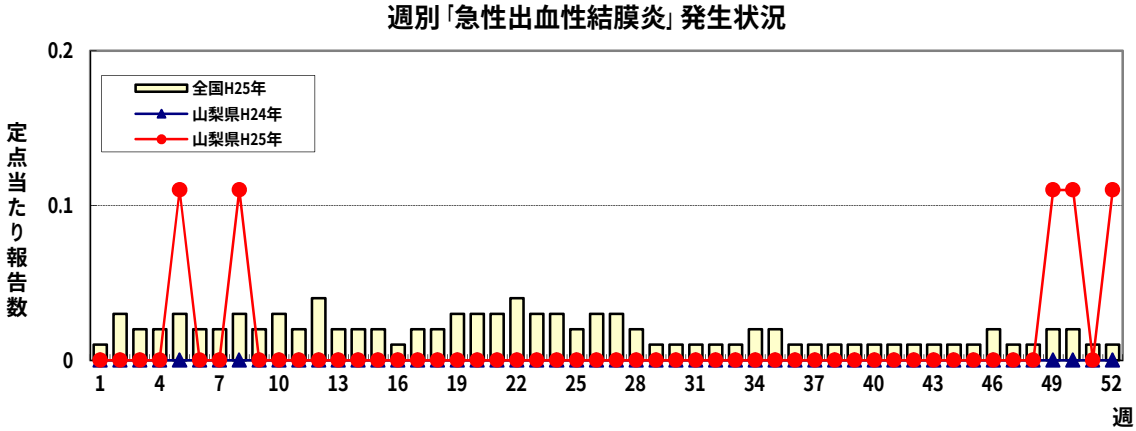
○ 急性出血性結膜炎

昨年は定点医療機関からの報告はなかったが、本年は 5 例（定点当たり報告数 0.56）の報告があった。



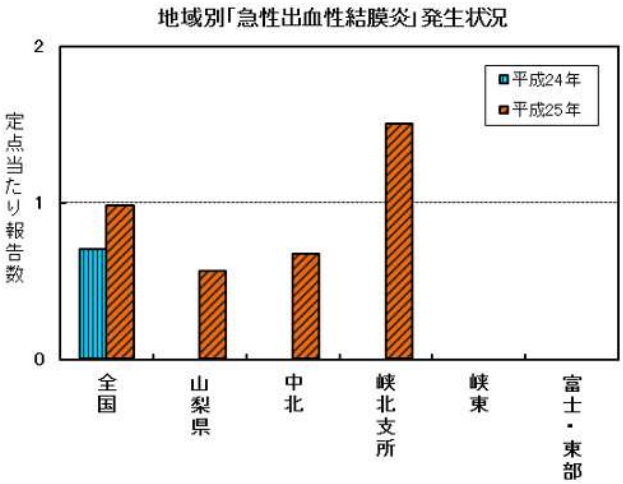
《週別発生状況》

第 5、8、49、50、52 週にそれぞれ 1 例の報告があった。



《地域別発生状況》

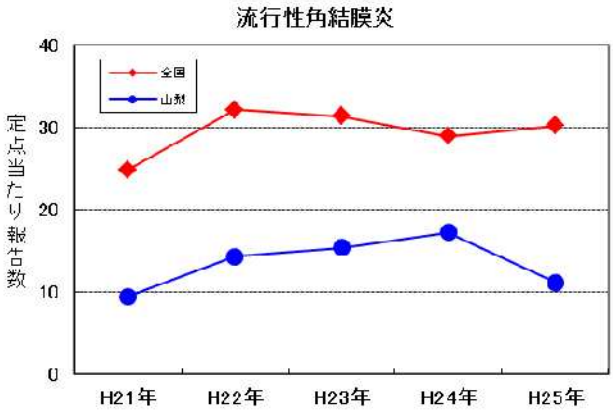
中北保健所管内から 2 例(定点当たり 0.67)、中北支所管内から 3 例（定点当たり 1.50）の報告があった。



○ 流行性角結膜炎

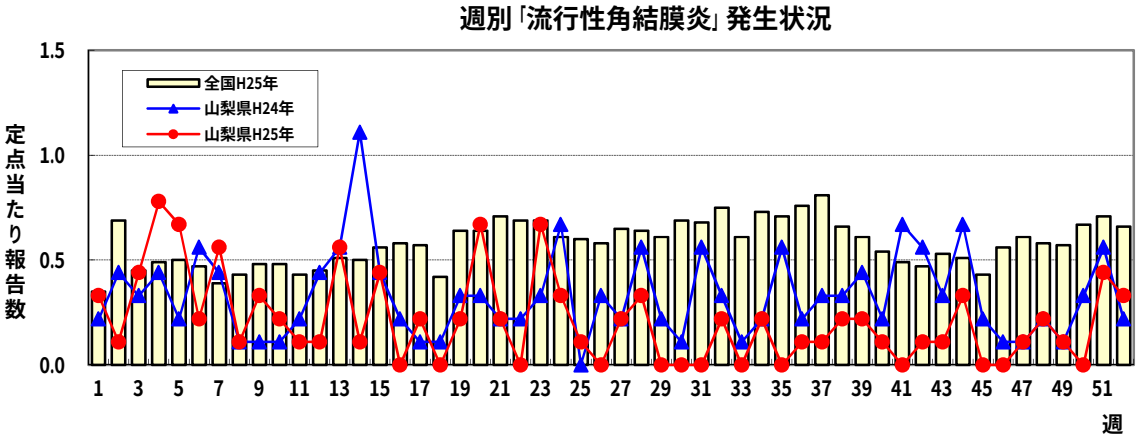
定点医療機関から 100 例（定点当たり報告数 11.11）の報告があり、前年（155 例）より減少した。

最近 5 年間の状況は、H24 年まで微増傾向だったが、本年は減少に転じた。



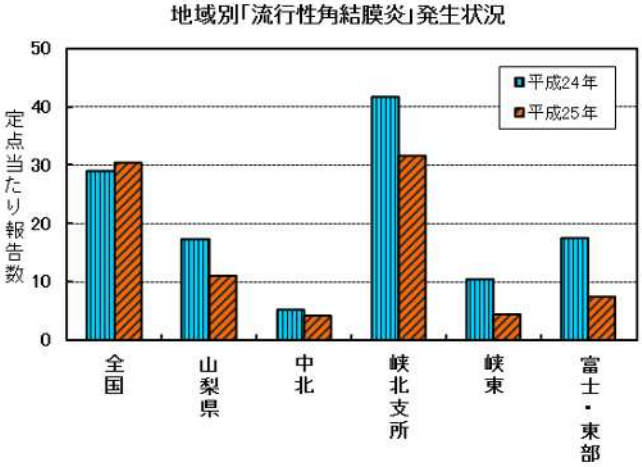
《週別発生状況》

年間を通して報告があったが、流行はみられなかった。



《地域別発生状況》

定点当たりの報告数が最も多かったのは昨年に続いて、峡北支所管内（31.50）で、定点医療機関がある全ての地域から報告されている。



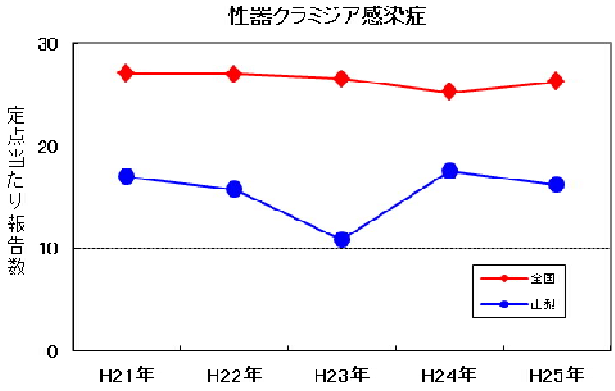
２－４　性感染症定点から報告された感染症

性感染症定点は、峡南保健所を除く 4 保健所管内に 9 定点あり月報として報告される。

平成 25 年に報告された総数は 255 例(昨年 252 例)、定点当たりの報告数は 28.33 で前年とほぼ同様であった。

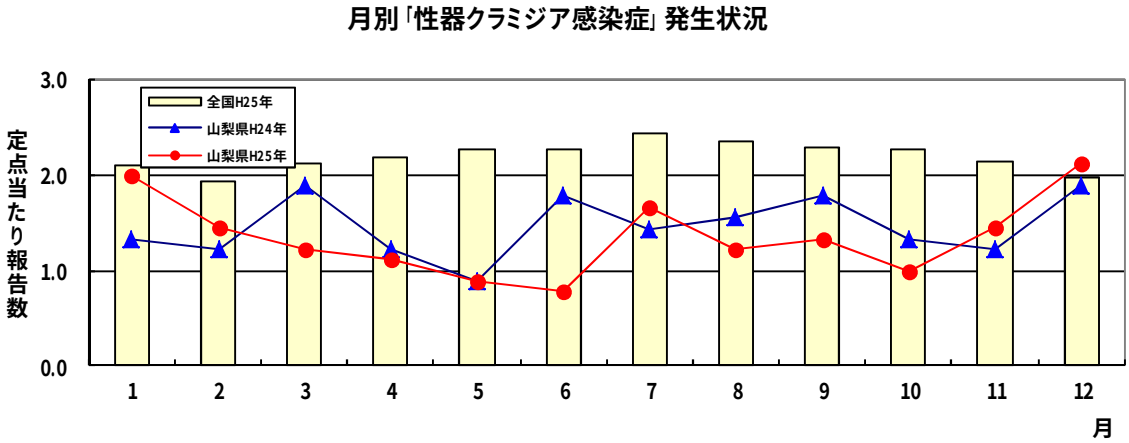
○ 性器クラミジア感染症

定点医療機関から 146 例（定点当たり報告数 16.22）の報告があり、前年（158 例）よりやや減少した。



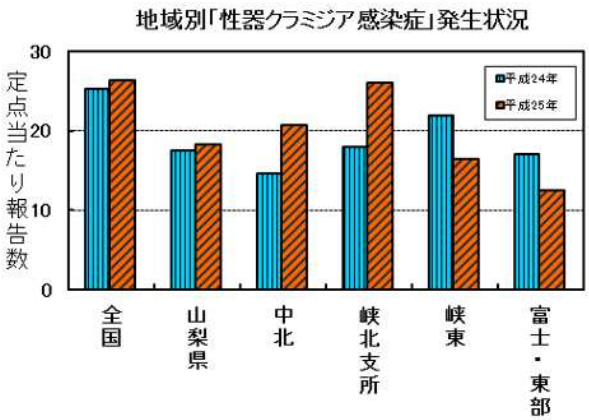
《月別報告数》

全国より少ない状況で、毎月報告があった。



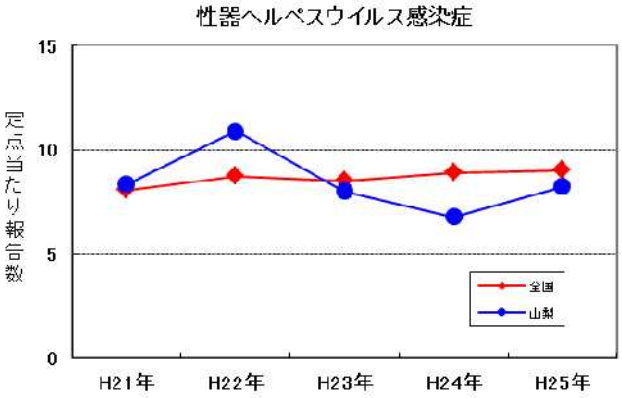
《域別発生状況》

定点当たりの報告数が最も多かったのは峡北支所管内（26.00）で、定点医療機関がある全ての地域から報告があった。



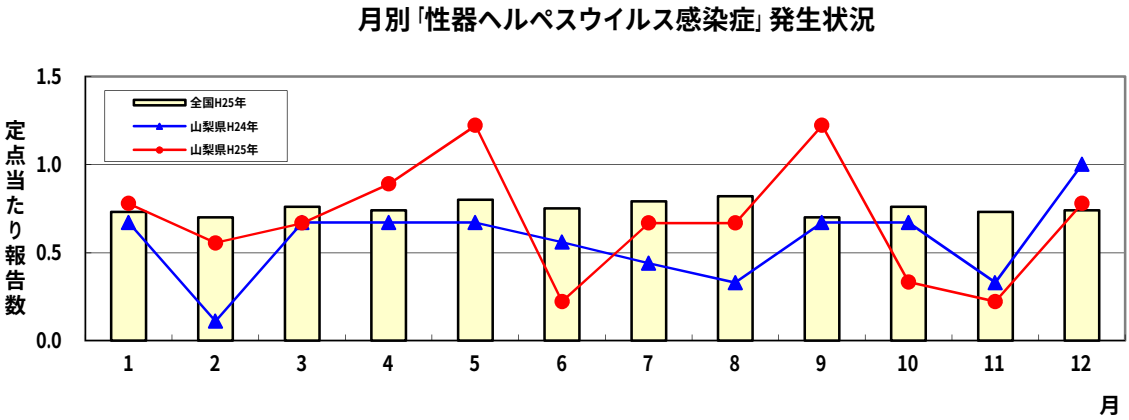
○ 性器ヘルペスウイルス感染症

定点医療機関から 74 例（定点当たり報告数 8.22）の報告があり、前年（61 例）よりやや増加した。



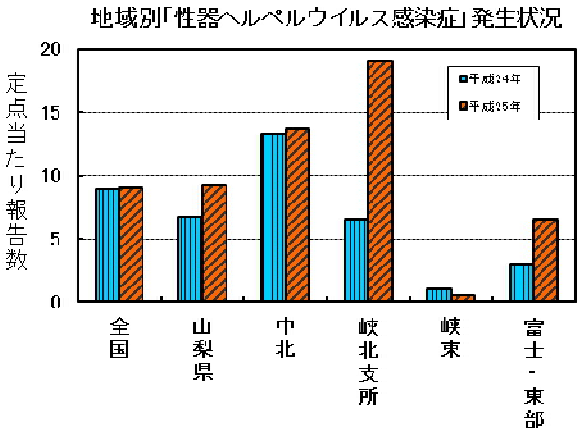
《月別発生状況》

毎月報告があった。



《地域別発生状況》

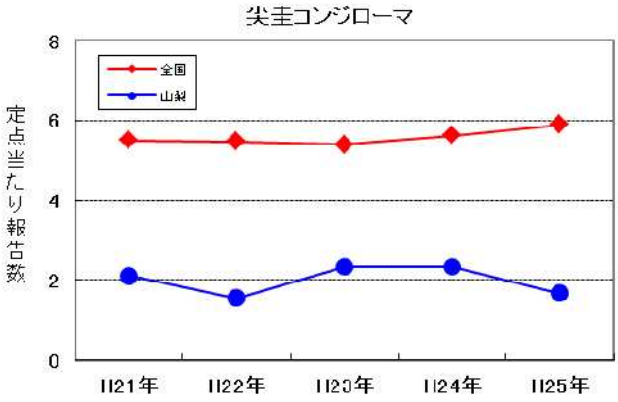
定点当たりの報告数が多かったのは中北支所管内（19.00）で、前年(6.50)の約 3 倍の報告があった。



○ 尖圭コンジローマ

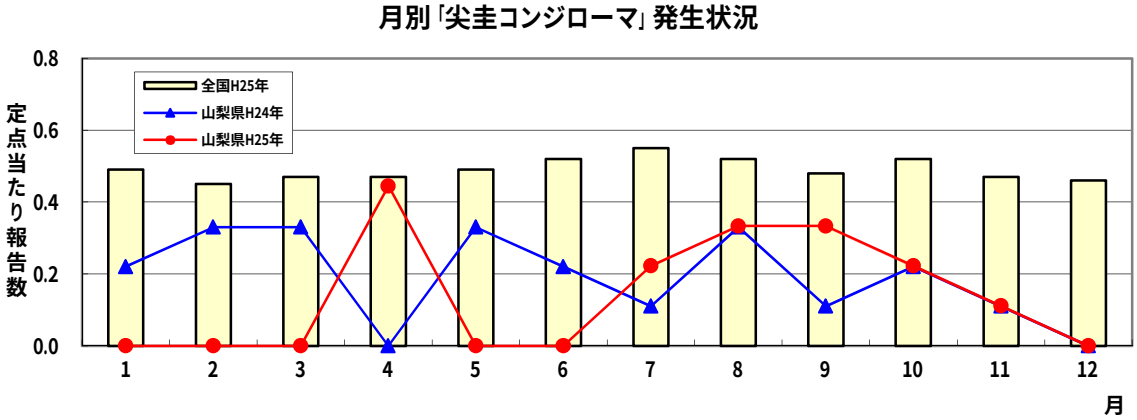
定点医療機関から 15 例（定点当たり報告数 1.67）の報告があり、前年（21 例）よりやや減少した。

最近 5 年間の状況をみると、定点当たり 2.00 前後を推移している。



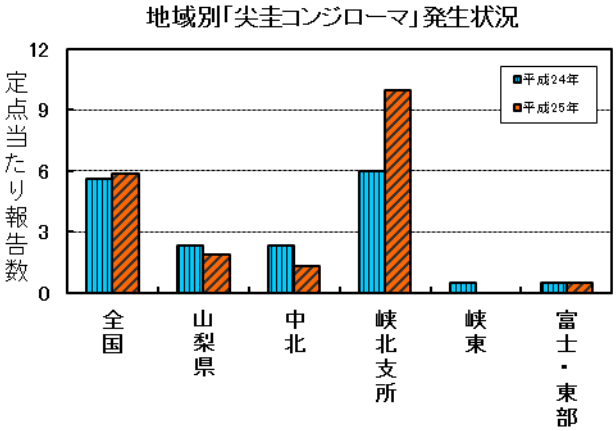
《月別発生状況》

4 月に 4 例、8・9 月に 3 例、7・10 月に 2 例、11 月に 1 例の報告だった。



《地域別発生状況》

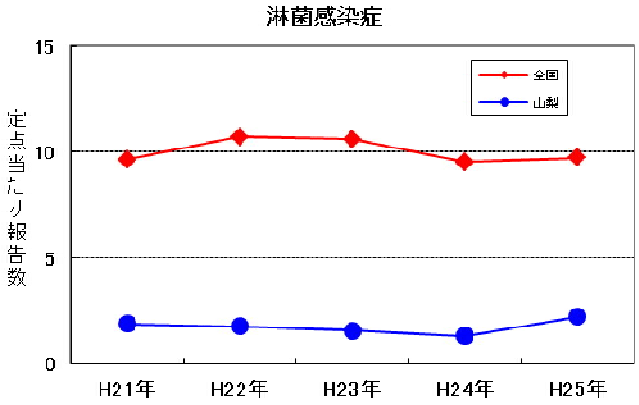
定点当たりの報告数がもっとも多かったのは峡北支所管内（10.00）で峡東保健所管内からの報告はなかった。



○ 淋菌感染症

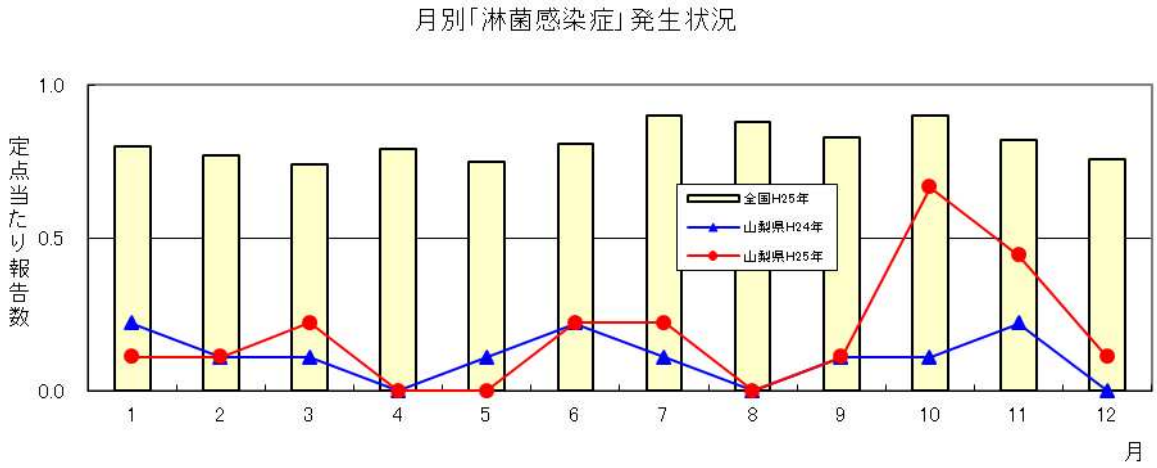
定点医療機関から 20 例（定点当たり報告数 2.22）の報告があり、前年(12 例)より増加した。

本年はやや増加したが、最近 5 年間の推移は横ばいである。



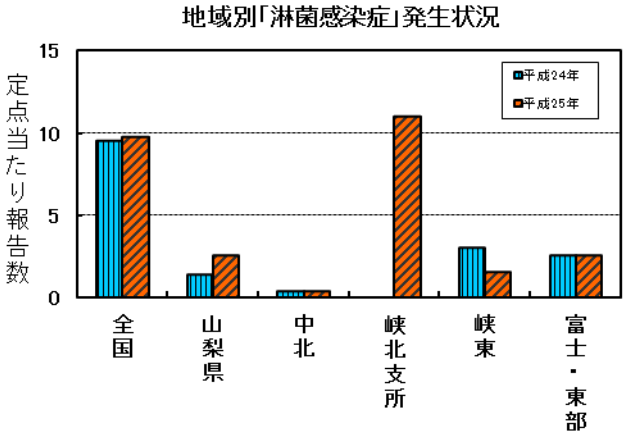
《月別発生状況》

4，5，8 月を除き、毎月報告があった。



《地域別発生状況》

定点当たりの報告数が最も多かったのは峡北支所管内（11.00）で、定点医療機関がある全ての地域から報告があった。



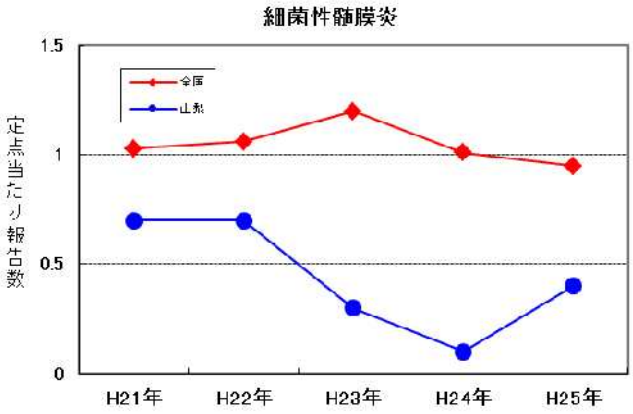
２－５　基幹定点から報告された感染症

基幹定点は県内全保健所管内にあり 10 定点である。細菌性髄膜炎（インフルエンザ菌、髄膜炎菌、肺炎球菌を原因とした場合を除く）、無菌性髄膜炎、マイコプラズマ肺炎、クラミジア肺炎（オウム病は除く）は週報として、メシチリン耐性黄色ブドウ球菌感染症、ペニシリン耐性肺炎球菌感染症、薬剤耐性緑膿菌感染症、薬剤耐性アシネトバクター感染症は月報として報告される。

報告数が多かったのは、メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症 132 例、マイコプラズマ肺炎 72 例であった。クラミジア肺炎（オウム病は除く）は 17 例であるが、近年の定点当たりの報告数は全国を上回っている。平成 23 年 2 月に追加された薬剤耐性アシネトバクター感染症は昨年に続いて報告はなかった。

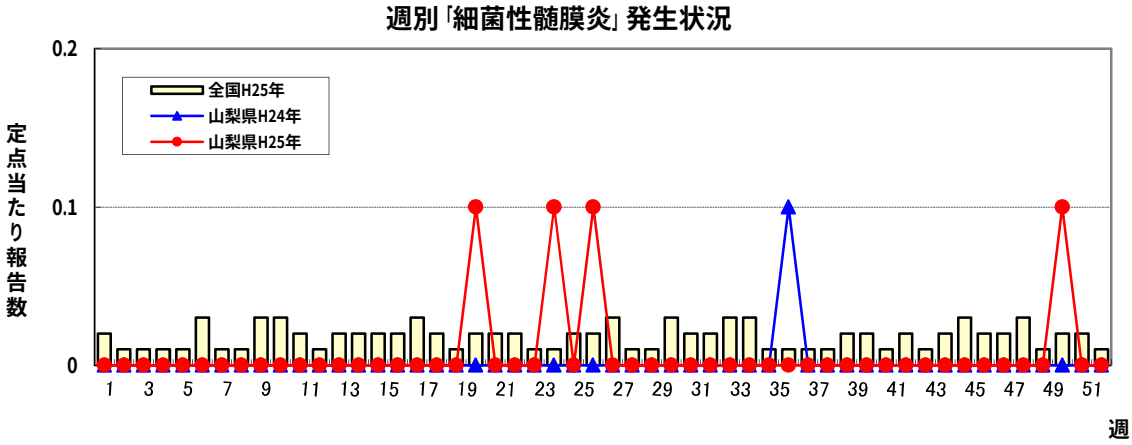
○ 細菌性髄膜炎

前年の報告は１例だったが、本年は定点医療機関から４例（定点当たり報告数 0.40）の報告があった。



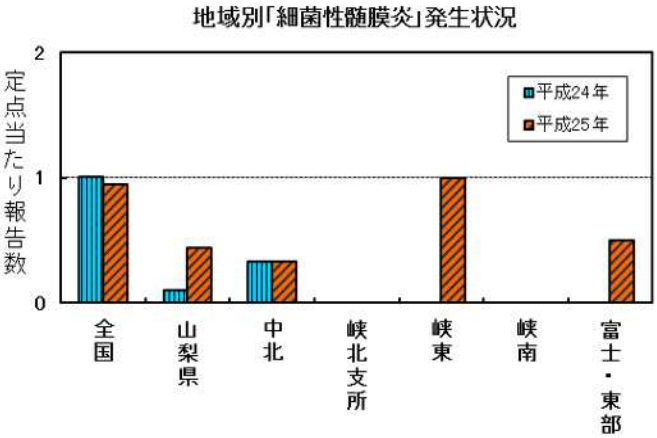
《週別発生状況》

第 20,24,26,50 週にそれぞれ１例の報告があった。



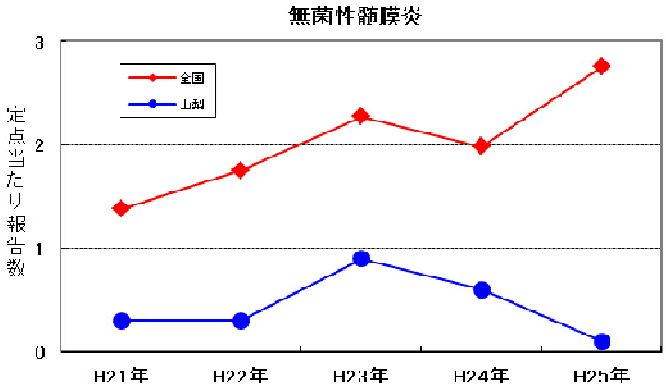
《地域別発生状況》

報告例の４例は中北保健所管内、富士東部保健所管内が１例、峡東保健所管内２例であった。



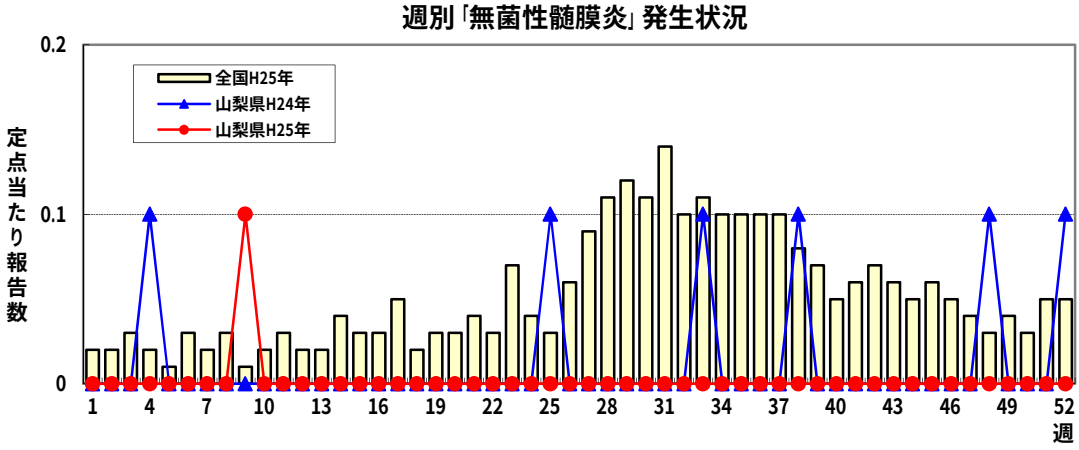
○ 無菌性髄膜炎

定点医療機関から１例（定点当たり報告数 0.10）の報告であった。



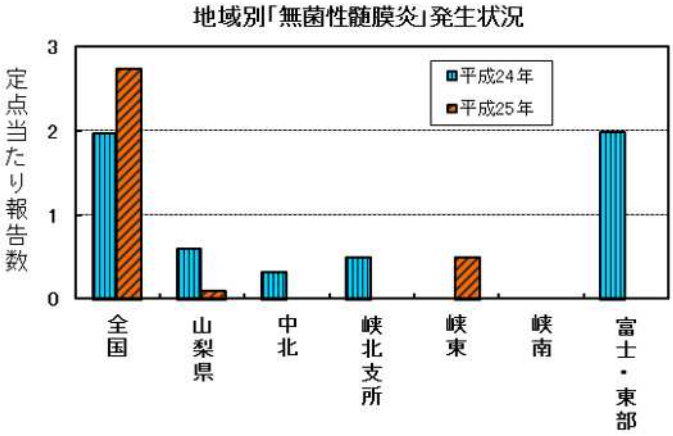
《週別発生状況》

第９週に１例の報告があった。



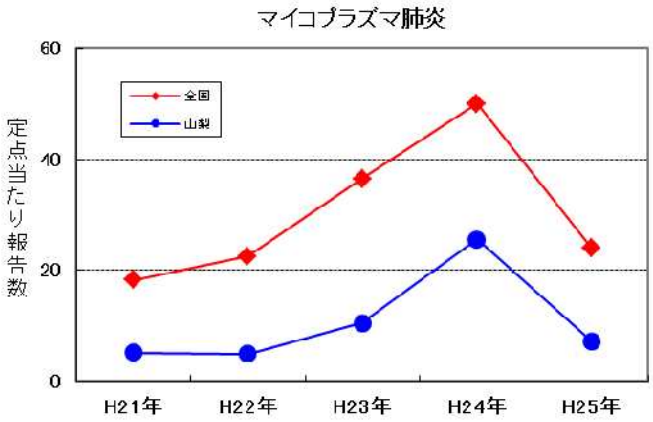
《地域別発生状況》

報告例の１例は、峡東保健所管内であった。



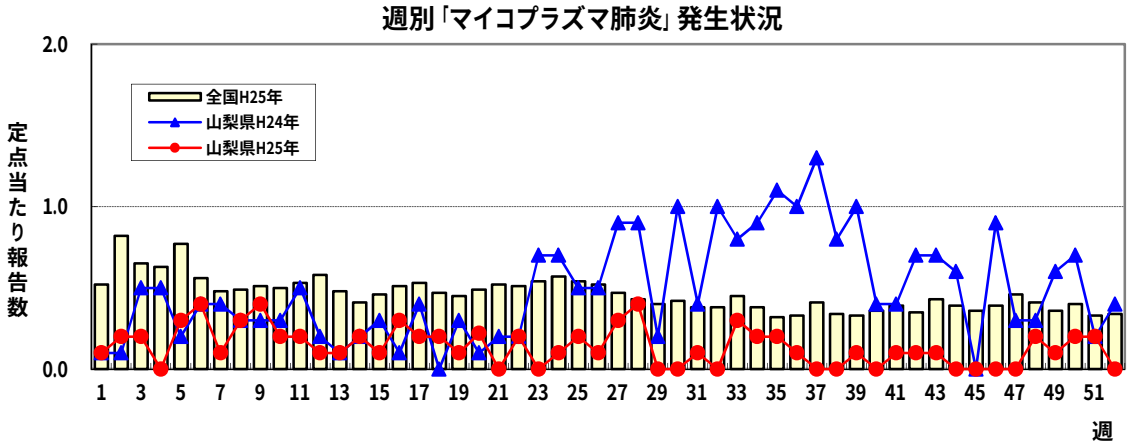
○ マイコプラズマ肺炎

定点医療機関から 72 例（定点当たり報告数 7.20）の報告があり、全国の状況と同じ動向を示している。



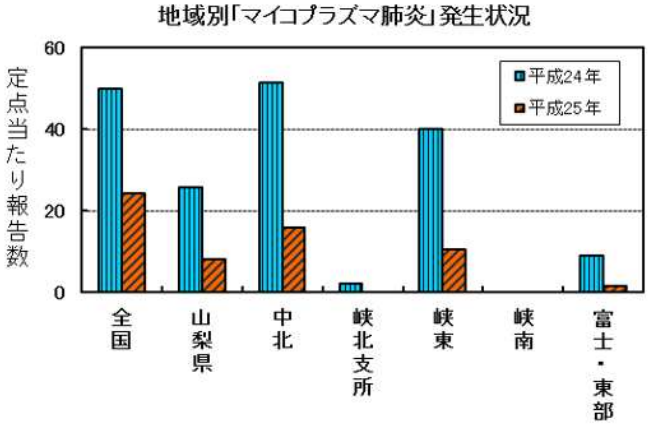
《週別発生状況》

年間を通して報告があったが、大きな流行はなかった。



《地域別発生状況》

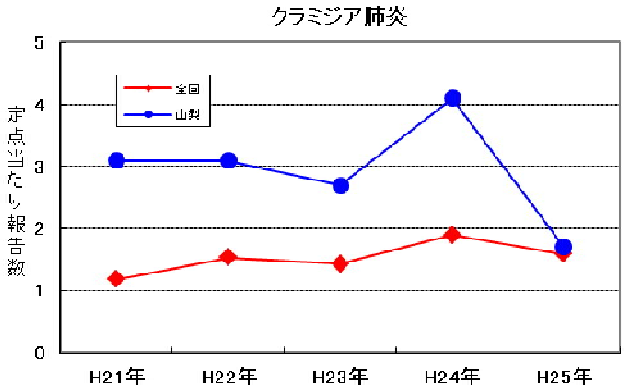
定点当たりの報告数がもっとも多かったのは中北保健所管内（15.67）で、峡南保健所管内を除くすべての地域から報告があった。



○ クラミジア肺炎（オウム病を除く）

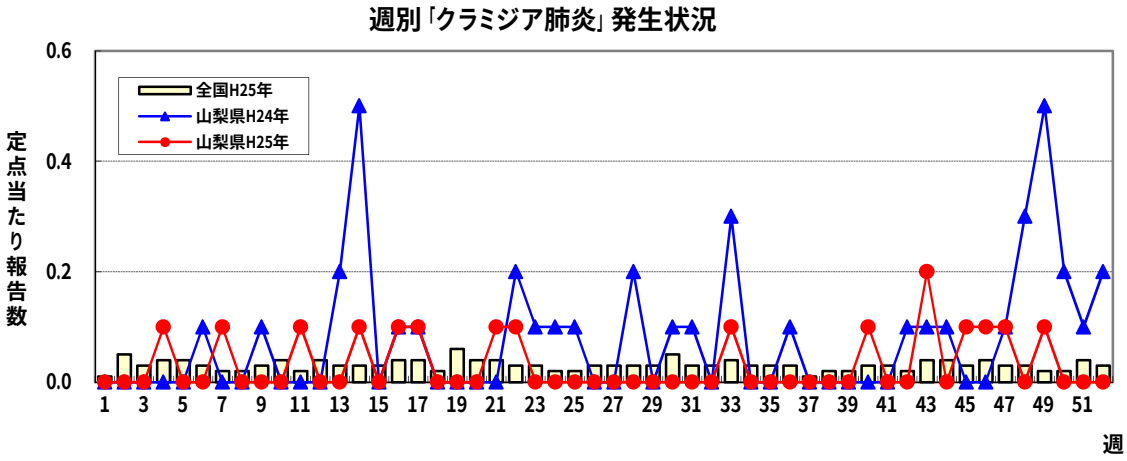
定点医療機関から 17 例（定点当たり報告数 1.70）の報告があり、前年（41 例）の約 40%の報告数であった。

最近 5 年間では、毎年定点当たりの報告数が全国を上回っている。



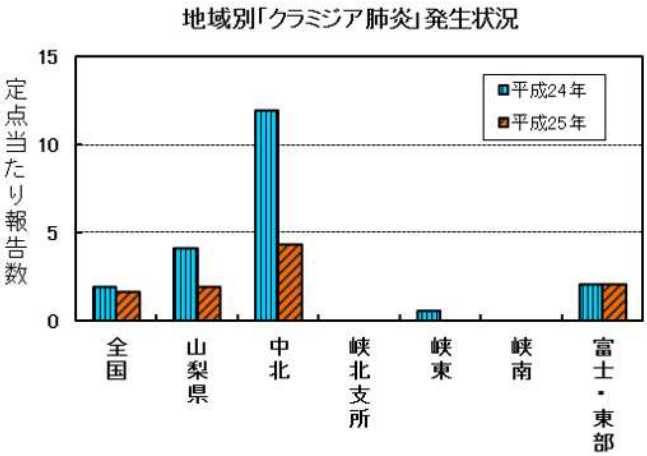
《週別発生状況》

年間を通して報告があった。



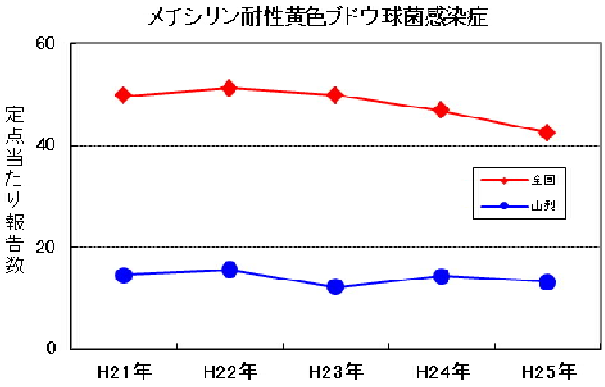
《地域別発生状況》

中北保健所管内 13 例（4.33）、富士・東部保健所管内 4 名（2.00）で、他の 3 地域からの報告はなかった。



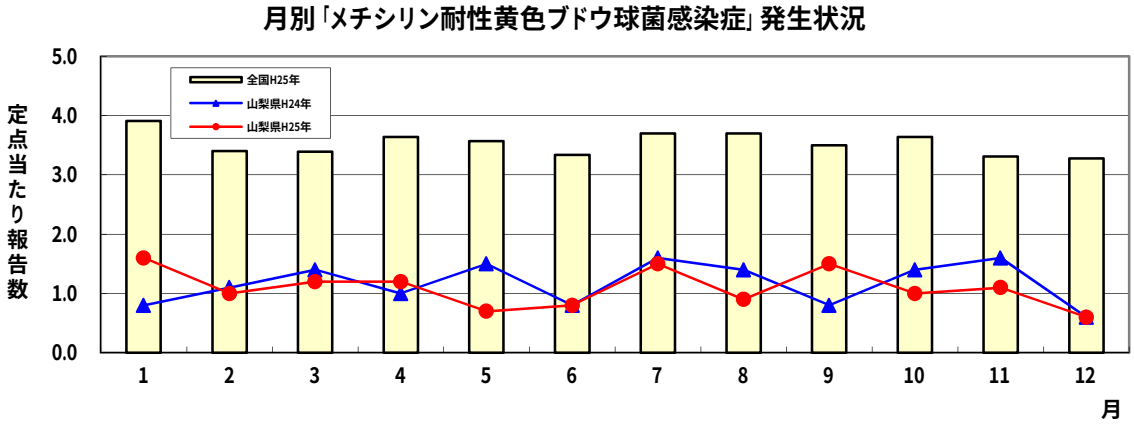
○ メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症

定点医療機関から 132 例（定点当たり報告数 13.20）の報告があり、前年に比べて 11 例減少した。最近 5 年間の状況は全国より少ない状況でほぼ横ばいの推移である。



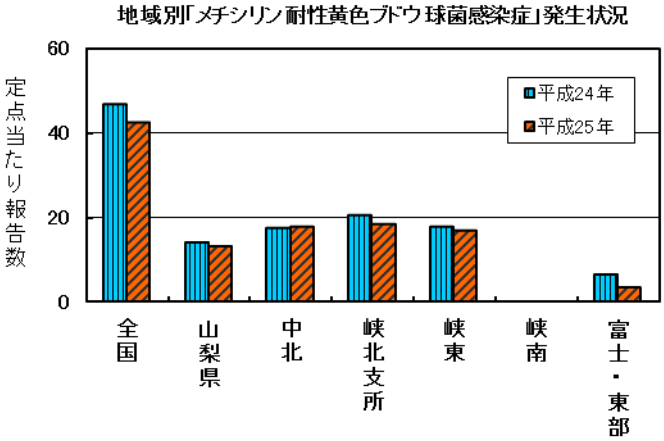
《月別発生状況》

全国より少ない状況ではあるが、毎月報告があった。



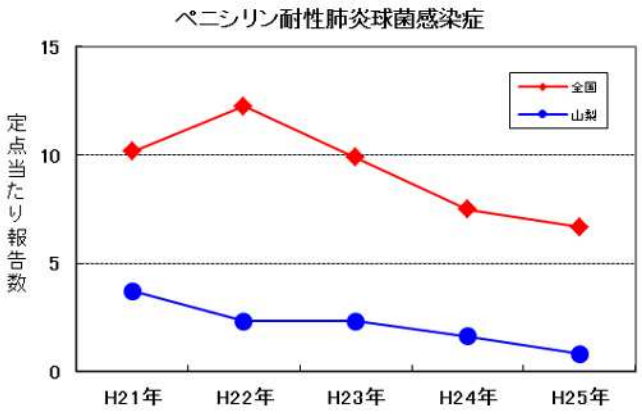
《地域別発生状況》

定点当たりの報告数が最も多かったのは峡北支所管内（18.50）で、峡南保健所管内を除くすべての地域から報告があった。



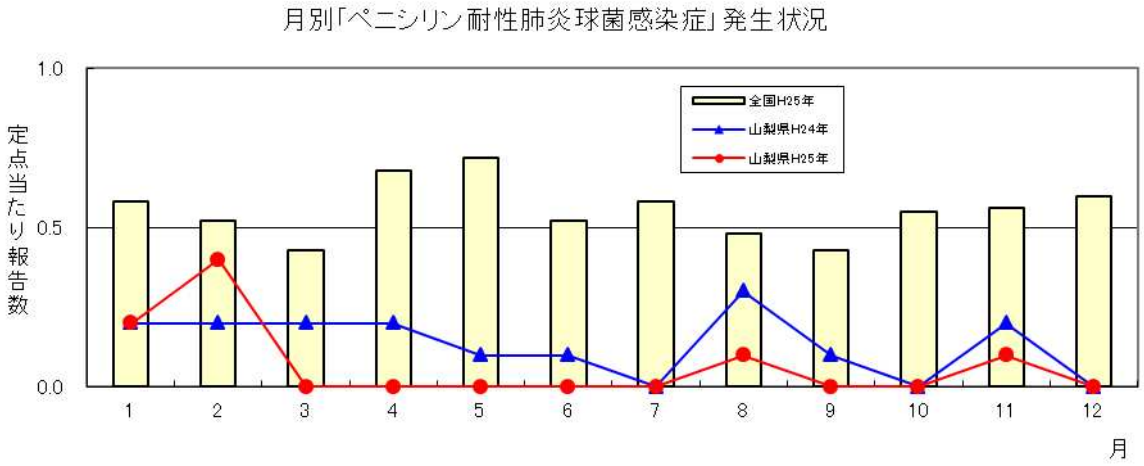
○ ペニシリン耐性肺炎球菌感染症

定点医療機関から 8 例（定点当たり報告数 0.80）の報告があり、最近 5 年間は減少傾向である。



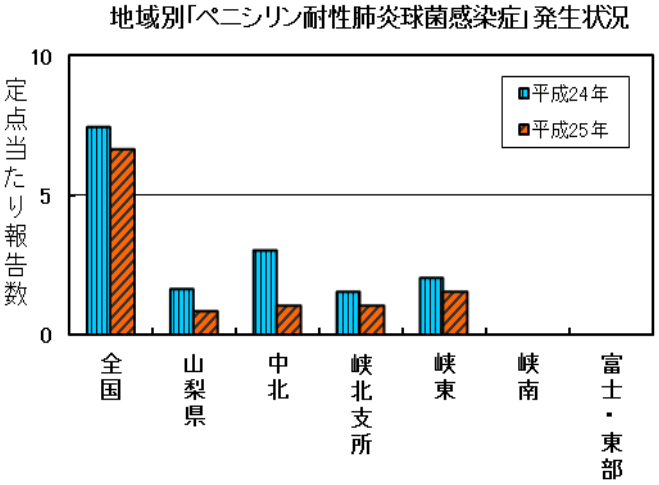
《月別発生状況》

報告があった月は 1 月、2 月、8 月、11 月のみであった。



《地域別発生状況》

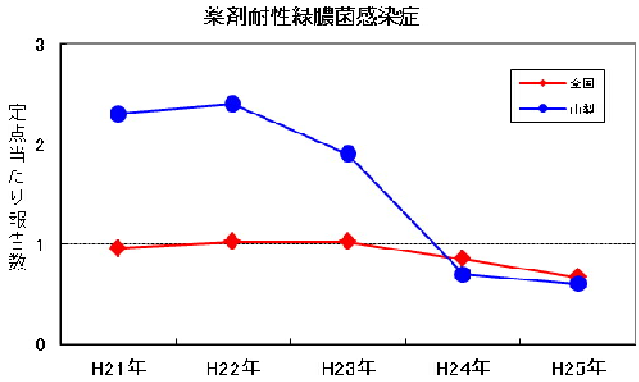
報告があった地域は、中北保健所管内 3 例（1.00）、峡東保健所管内 3 例（1.50）、峡北支所管内 2 例（1.00）で、他の 2 地域からの報告はなかった。



○ 薬剤耐性緑膿菌感染症

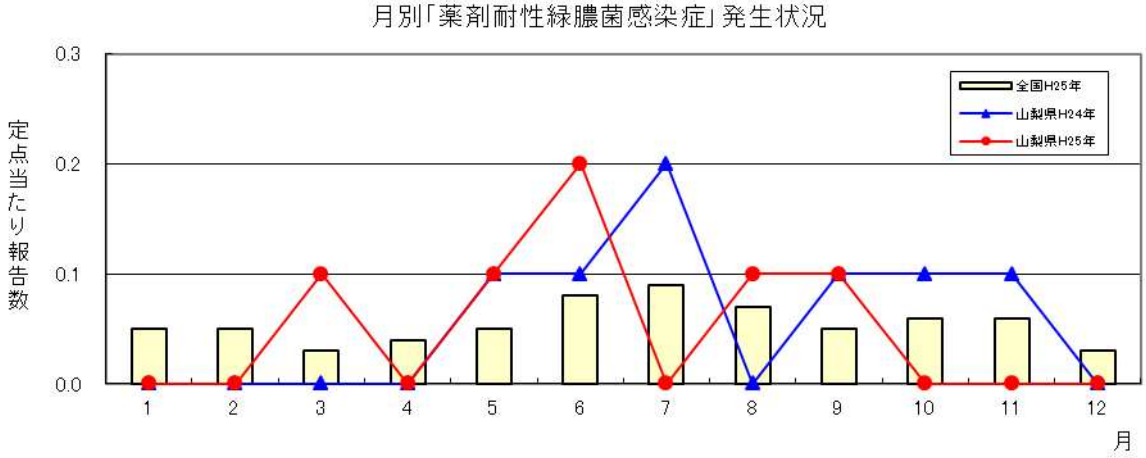
定点医療機関から前年より 1 例少ない、6 例（定点当たり報告数 0.60）の報告だった。

最近 5 年間の定点当たりの報告数は H23 年までは全国を上回っていたが、H24 年から全国を下回った。



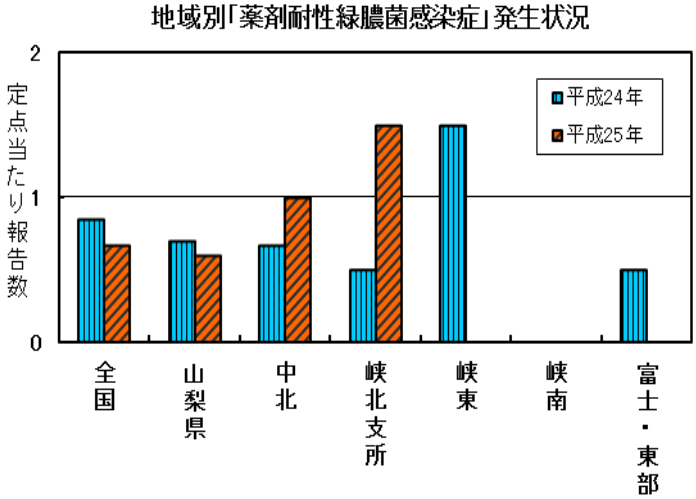
《月別発生状況》

報告があった月は 3・5・6・8・9 月のみであった。



《地域別発生状況》

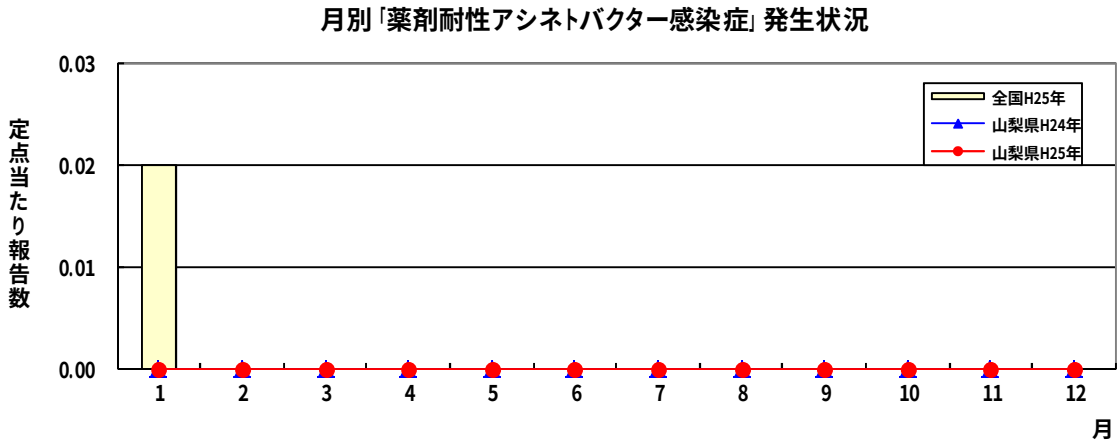
中北保健所管内、中北支所管内からの報告で、他の 3 地域からの報告はなかった。



○　薬剤耐性アシネトバクター感染症

山梨県内の報告はなかった。

《月別発生状況》



《地域別発生状況》

なし

III　病原微生物検出状況

1　ウイルス検出状況

県内 19 箇所の病原体定点及び集団発生事例において採取された 855 検体についてＰＣＲ法と細胞分離法により、496 検体（58.0%）からウイルスを検出した。

ノロウイルスが 272 件と 54.8%を占め、次いでインフルエンザウイルスが 201 件（40.5%）であった。他にアデノウイルス 6 件（1.2%）、A 群ロタウイルス、ライノウイルスが 4 件（0.8%）、風疹ウイルス、サポウイルスが 3 件（0.6%）、ヒトヘルペスウイルス、ヒトメタニューモウイルス、ＲＳウイルスがそれぞれ 1 件（各 0.2%）検出された。

インフルエンザウイルスの型別検出状況は、A(H1)pdm09 が 17 件(8.5%)、A(H3)香港型が 140 件（69.6%）、B 型が 44 件（21.9%）であった。1 月に検出されたウイルスは A(H3)香港型が圧倒的に多かった(97%)ことから、患者報告数がピークだった第 3～5 週（1 月中旬～2 月上旬）はこの型が流行の原因と思われた。

胃腸炎患者（病原体定点及び集団発生事例）から検出されたウイルスは、ノロウイルスＧⅡが 259 件、ノロウイルスＧＩが 13 件、A群ロタウイルス及び型別不明のアデノウイルスが 4 件、サポウイルスが 3 件と、夏季をのぞいてほぼ年間を通してウイルスが検出された。

平成 25 年 月別ウイルス検出状況

			1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
検体数			267	122	139	33	48	41	16	30	2	21	35	101	855
検出ウイルス	インフルエンザウイルス*	A(H1)pdm09	2	14		1									17
		A(H3)香港型	90	33	15	2									140
		B型	1	15	23	2	3								44
	風疹ウイルス				1	2									3
	ヒトヘルペスウイルス	6型	1												1
	ヒトメタニューモウイルス			1											1
	ライノウイルス				1		3								4
	RSウイルス								1						1
	アデノウイルス	型別不明			2			1						3	6
	ノロウイルス*	GI	2	4	1		5	1							13
		GII	55	25	70	3	3	6				6	29	62	259
	ロタウイルス*	A群			4										4
	サポウイルス*					3									3
	計		151	92	117	13	14	8	1	0	0	6	29	65	496

*集団発生を含む

平成 25 年 疾患別ウイルス検出状況

疾　病	検 出 病 原 体	検出数
インフルエンザ様	インフルエンザウイルスA（H1）pdm09	17
	インフルエンザウイルスA（H3）香港型	140
	インフルエンザウイルスB型	44
	アデノウイルス	2
	ヒトメタニューモウイルス	1
	ライノウイルス	1
発疹様	風疹ウイルス	3
	ヒトヘルペスウイルス	1
手足口病	RSウイルス	1
	ライノウイルス	1
咽頭炎	ライノウイルス	2
胃腸炎	ノロウイルスGI	13
	ノロウイルスGII	259
	A群ロタウイルス	4
	アデノウイルス	4
	サポウイルス	3
計		496

2　細菌検出状況

三類感染症の腸管出血性大腸菌感染症患者から分離された菌株（11 株）について血清型及び毒素型の検査を実施したところ次のとおりであった。

分離月日	血清型	毒素型
4.1	O103:H2	Stx1
4.17	O157:H7	
7.22	O121:H19	
7.22	O157:H7	
8.1	O157:H7	Stx1,2
8.5	O157:HNM*	
8.18	O103:H25	
9.10	O157:H7	Stx1,2
10.20	O157:H7	Stx2
10.27	O157:HNM*	
11.13	O157:H7	

*:非運動性